

異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。

科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、^{すた}廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界——

ミュールゲニア全土を巻き込んだ大戦から、長い長い時が流れた。
危ういバランスを保っていた平和は、そろそろ終焉を迎えようとしている。

大陸北部地方の大国ザーメインは、新たな王を迎えて生まれ変わった。

彼は小さな権力にしがみつくことを良しとせず、今や^{せかいせいほ}世界制覇の野望に燃えている。

最強の王が発する命令の元、^{しつこく}漆黒の軍団が一斉に^{いつせい}侵攻を始め、同時に複数の国と^{せんか}戦火を交えるに至っている。

そして、そんなザーメインの^{しんりやく}侵略を受けようとしている国の一つに、大陸南西部の小国「サンクワール」があった。

国力はかの大国の一割にも満たず、^{きじょう}士気も^{ゆうぐう}振るわない。

さらには、現王は貴族のみを^{かじょう}過剰に^{ゆうごう}優遇し、既に^{じんしん}人心を失っている。

弱小国サンクワールの^{めつぼう}滅亡は、もはや避けられない運命のように見えた……

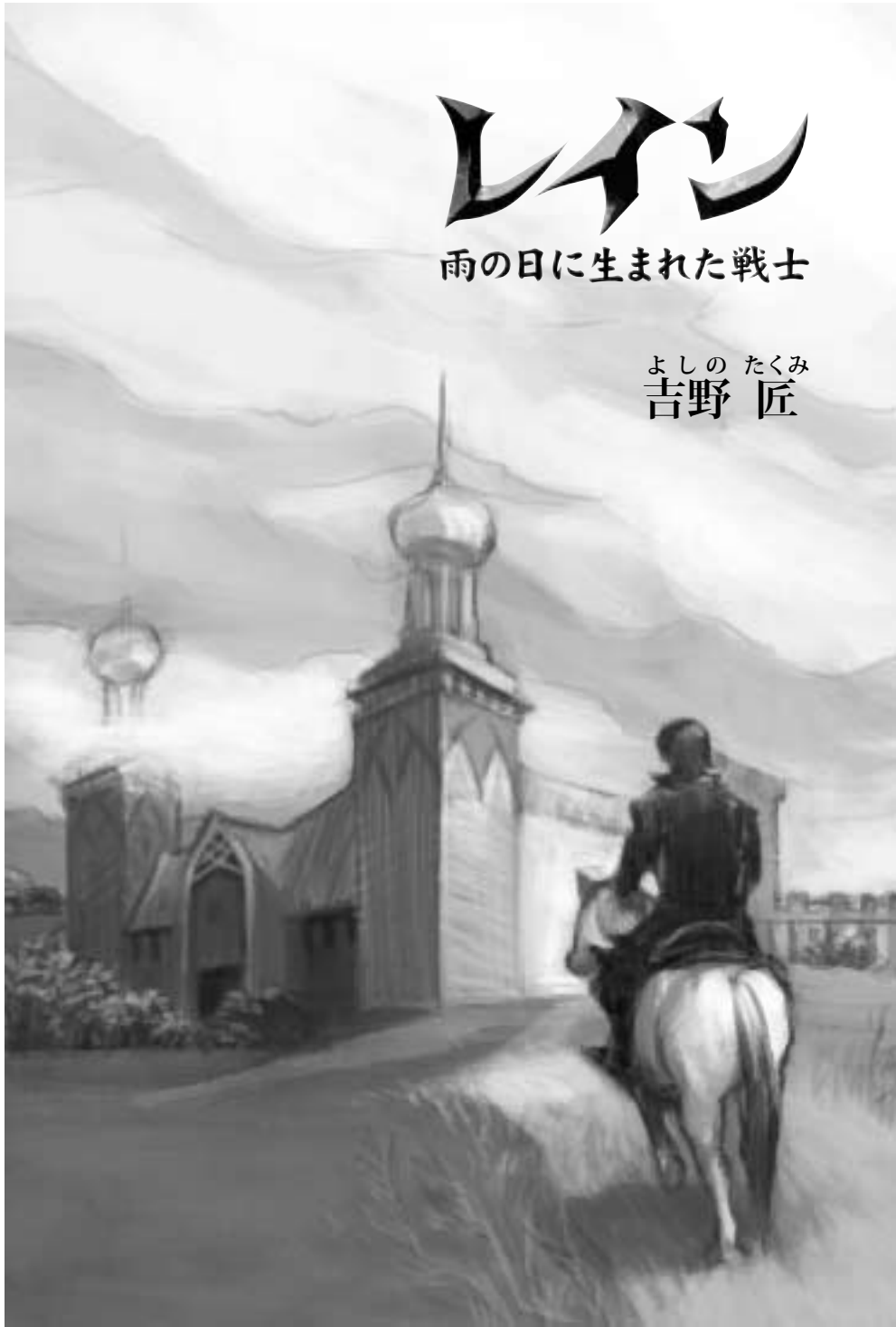


※^{どりょうこう}度量衡はあえてそのままにしています。

ライツ

雨の日に生まれた戦士

よしの たくみ
吉野 匠



目次

プロローグ 7

第一章 レイン、謹慎きんしんになる 13

第二章 ラルフアスの戦い 69

第三章 シェルフア、ガルフォート城を去る 113

第四章 再会 169

第五章 対決 227

エピローグ 雨の日に生まれたレイン 313

特別書き下ろし編 友誼ゆうぎの始まり——ルナンにて—— 327

あとがき 362

プロローグ

自分の城の裏庭をゆつたりと散歩していたレイグル王は、気配を感じてふと立ち止まった。近辺にはべつっていた衛兵達(えいへい)がいつの間にか消えており、代わりに見慣れた数人の男達が、ばらばらと中庭に侵入してきた。

このザーマインを支えてきた將軍達であり、今はレイグルに臣従(しんじゆう)する身でもある。

しかし、作り物とはいえない浮かべていた恭しい表情(きょうじ)が消え、今彼らの顔に浮かぶのは、殺気の
のみ……

「ほお。俺の手間を省(は)いてくれたか。自分達から馬脚(ばきゃく)を現すとほ」

片眼を隠すほど長い、煌めく銀髪をかきあげ、レイグルはすうっと黒瞳(くろどう)を細める。

伶俐(れいり)な美貌(びぼう)に凍(こ)てつく表情があつた。

微塵(みじん)も動揺(どうご)を示さないその態度に、歴戦(れきせん)を誇る四將軍達は、思わず後退(あひずき)りたい衝動(しょうどう)にかられた。が、代表(だいひょう)で四十絡(かろ)みの中年、アーヴィンが大声を発した。

「黙れ！ 五年前に先王陛下がおまえに殺されて以来、我々は耐えに耐えてきた。しかしつ。もう

我慢の限界だつ。この世界に、悪戯に争いを持ち込もうとするおまえのやりよう、我々は絶対に看過できんっ」

そうだそうだつ、と残る三人も口々に叫ぶ。その勢いを保ったまま、それぞれ剣を抜く。四本の長剣が、陽光を反射して一斉にざらりと光った。

しかし、それでもレイグルの余裕は消えない。

外見は明らかに二十代、將軍達に比べれば若輩者だろうに、ただ一言、「くだらぬな」と吐き捨てた。

「なにっ」

「おまえ達ごときの実力で、この俺が倒せると本気で思うのか。そこまで愚かだったのか。ならば、ちようどいいやつかい払いだ」

人ではなく、物を見るような醒めた目つきで四人を見やる。

「今の俺が望むのは、余人を超えた——いや」

言いかげ、ふつと笑う。

「余人どころか最強の魔獣をも倒す、強く有能な部下だ。おまえ達のように、自分の実力も計れぬ凡才は不要。特に今後の計画にはな」

一王の言葉を聞き、四人は一樣に眉をひそめた。

最強の魔獣といえ、数千年を生きたドラゴンのことを指すが、レイグルの言うのはドラゴンス

レイヤーのことだろうか。

いにしえの伝説に言う。

ドラゴンを独力で倒した者は、この最強の魔獣が持つ力を、全て受け継ぐことが出来ると。

……無論、そんなものはあくまでも単なる伝説である。

「馬鹿馬鹿しい。やはりおまえは、どこか狂っている。もつと早く決行すべきだった」

彼らの一人、ピアズが吐き捨てた。

レイグルは冷笑を浮かべたのみである。

「馬鹿馬鹿しい……か。まあいい。どうせ、おまえ達はここで死ぬ。これから先の話は、おまえ達には無縁なこと——」

途端に。

レイグルは動いた。

バシユツ

不吉な真紅の輝きが、叛逆者四人の瞳を灼いた。

抜き放った魔剣、その刀身が放つ紅き血のような魔法のオーラを引きずり、彼らのうち、ピアズとの距離を一瞬のうちに詰める。

まさに、『人間を越えた』速さだった。

戦慄しているはずのピアズに出来たのは、実に剣を持ち上げることだけだった。

それほど圧倒的な速さであり、レイグルの姿がぶれて見えたくらいである。

雷光のように振り下ろされた魔剣が、ピアズをガードした剣ごとまっふたつに縦割りにする。

すかさず、レイグルがさつとまた間合いを取る。一拍置き、ピアズの身体が鎧ごと割れた。噴水

のように鮮血がしぶき、側で呆然とする元同僚達に降り注ぐ。

「ひっ」

思わず息を呑み、アーヴィンが数歩下がる。レイグルは無造作に片手を上げ、小さく声にした。

「魔光よ！」

と、真っ白な魔力の光が爆発的な奔流となり、彼の掌からほとばしった。

怯懦を示したアーヴィンは、まともにそれをくらい、真っ黒に胸部を炭化させて倒れ伏す。

ブスブス煙りを上げている死体から、残る二人がざざと退いた。

「ま、魔法だ?! しかし、ルーン（呪文）の詠唱がなかったぞっ」

「こんなことが、こんなことが人間に可能なはずはないっ。まさか貴様の正体は——」

レイグルは、皆まで言わせない。

またしても無造作に間合いを詰め、魔剣を豪快に横薙ぎにする。なんと、二人を一緒くたに斬っていた。

彼らは呻き声すら上げられなかった。

ほとんど身体が切断するほどの傷を負い、両者とも瞬時に絶命した。既に生気を失った目が恨めしげに空を見上げ、噴き上がる血が大地をまたらに染めていく。

生きている時は、その勇猛さを誰もが認めた將軍達だった。それがたった十秒ほどの間に、四人とも物言わぬ死体と成り果ててしまったのだ。

レイグルは別に表情を動かすでもなく、愛用の魔剣「ジャステイス」をパチンと鞘に収める。もはや死者達には目もくれず、冷静な顔で天を仰いだ。

「さて。こうなると、いよいよ新たな部下を捜さねばな。俺が求めるほどの者が、この世界にいるかどうか……」

独白のように奇妙なセリフを呟き、唇を歪める。

まあ、候補がないでもない。

そろそろ、試すべき時だろう……

第一章 レイン、^{きん しん}謹慎になる



サンクワールの主城、ガルフォート城。

真っ赤な絨毯を敷き詰めた謁見の間に、大勢の重臣達が集まっていた。

今日は軍議である。

奥の一段高い玉座に腰を据えたダグラス王の前に、それぞれ定められた地位に従い、文官と武官が左右に並んでいる。

そのほとんどが金髪に碧眼……つまり貴族の者達だ。

ただ、王の至近に跪くレインのみが、つやつやした黒髪に、黒い瞳といった外見的特徴である。

今日はまた、一段と悪戯っぽく瞳が光っている。

この男は、いついかなる場面においても、不敵かつふてぶてしい表情に見えるのだが、ご多分に洩れず、今もそんな顔である。

少なくとも、ラルファスにはそう見えた。

彼自身は、細面の整った容貌であり、あまりレインとは共通点がない。

普段、このガルフォート城内の女性達が、上下の別無く熱を上げる優しい顔立ちなのに、今は色濃く憂いが浮かんでいる。

レイン、もういい加減にしると思っていたが——あいにくラルファスの祈りは、同年代の親友には届かなかつた。

『先程から申し上げる通り、ザーマインの露骨な誘いに乗るのは得策ではありません。兵を差し向けるなど、もつてのほかです。ぶっちゃけ、わざわざ相手の罠に頭から飛び込むのと同じかと』

イヤミなほどでつかい声を張り上げるレイン。

ダグラス王は巨眼に怒りの炎を燃やし、不遜な男を睨みつけた。

「貴様つ、その口の利き方はなんのつもりか。わしの作戦に異を唱えるだけでなく、軽んずる気と見える！」

頬に大きな傷の残るダグラス王が巨体を震わせて怒鳴った。

文官達の喉が鳴ったが、怒鳴られた当人であるレインは、まるで応えてはいない。それどころかこの状況を楽しむかのように、口元が綻んでいるくらいだ。

並の胆力ではないのである。……厚かましい、とも言いかもしれないが。

その証拠に、レインはちらつとラルファスの方を見て、にんまりと笑った。

目で問いかけてみたが、既に友は正面に向き直っていた。

そして、またしても王に諫言——というか、文句。

「作戦？ 陛下、四方の敵に一万そこそこの兵をぶつけるのは、作戦とは言わぬかと。自殺の方法としてなら、なかなか確実そうですか……」

「なにっ」

ダグラス王はギリツと歯を食いしばった。そろそろ忍耐がぶち切れそうである。

ラルファスには、レインの気が知れなかった。王の気が短いことは、彼もよく知っているはずなのだ。このままでは冗談ではなく、レインは王に斬られてしまう。

おまえは、それほどこの決定が不服なのか……

大陸北方の強国ザーマインが、ルナンを攻め滅ぼしたのは、つい半年前のことである。

このサンクワールのすぐ北に国境を接し、長年サンクワールと争ってきたルナンも、南下を始めたザーマインの前には、ひとたまりもなかった。

敵が減って嬉しい、などと喜んではいられない。

どう考えても次にザーマインが狙うのは、ミュールゲニア大陸南西端の小国、つまりこのサンクワールに他ならない。

もちろん、ルナンの崩壊とともに、すぐに警戒が強化された。間諜を防ぐため、旧ルナンの国境には関所が設けられ、私兵を擁する各上將軍達は、王の命令で戦いの準備に追われた。

そして先月の末。予想通り、とうとうレイグル王が、大規模な大軍を動員した。王の定めた指揮官の命令の元、一斉に南下し始める。こうなると、目標はこのサンクワールだと子供でもわかる。

ダグラス王その人も、敵を奇襲によって打倒する覚悟を固め、総勢七人の上將軍達に出陣を命じたのだ。

ラルファス以下の上將軍達は、その命令に従い、私兵を引き連れて居城から続々とガルフォート城に入城した。

——のだが、レインだけはその命令をあつさりとは無視し、ただ一人、手ぶらでやってきた。これだけでも厳罰物である。

それに加えてこの反抗的な物言い……ラルファスがハラハラするはずである。

「レインよ、わしはおまえを平民にも関わらず取り立て、領地持ちの上將軍に据えてやった。騎士として最高の地位を与えたのだぞ、それをっ」

怒りのあまり、王は声が詰まったようだった。対するにレインの返事は軽い。

「はあ。それについては感謝してませんが」

どう聞いても感謝などしてそうにない。むしろ、相手を馬鹿にしているようだ。

「おのれっ、ぬけぬけと。ならばっ、どうして命令通りにせぬ！」

はあというため息の音。

無論、レインが発したものだ。

「先程から申し上げているはず。相手に劣る兵力で、策も無くぶつかるなど反対ですと。ご理解いただけませんかね」

やれやれ、という感じで首を振る。

「少数の部隊で大軍にぶつかり、華々しく散る——傭兵上がりの私としては、そういう玉砕戦法は趣味じゃないですしね」

「なにが、『趣味じゃないですしね』だ、愚か者っ。おまえの意見など、問題ではないわっ」
「そうだそうだっという声、そこかしこからした。」

サンクワールの軍事を代表する、ラルファス以外の五人の上將軍達である。レインの評判は、同僚にもすこぶる悪いのだ。もともと、本人はさっぱり気にしていなかったが。

「旧ルナンの地は既にザーマイン領、つまり敵地です。そこへノココ奇襲を掛けに行くなど、正気とは思えません」

「き、貴様っ、それが主君に言う言葉か！」

「ジャギン！」

とうとうダグラス王が剣を鞘走らせた。

玉座ぎょざから立ち上がり、大股でレインに近づこうとする。周囲のどよめきの声。その中には何かを期待するような響きも多い。

さすがに、これを見過みごす訳にはいかない！

ラルファスは素早くその場から走り出て、盾になるかのようにレインの前に立ちふさがった。

「お待ちください、陛下っ」

「どけっ、ラルファス！ 今日という今日は勘弁ならんっ」

「それにしても斬るなど……やりすぎでありましょう！」

「黙らぬか、ラルファスっ」

「いいえっ、黙りませぬっ！」

氣迫を込めた大声に、辺りはたちどころに静まりかえった。驚いたのか、王でさえ持ち上げている剣を下ろした。

いつもは穏やかなラルファスだが、時として別人のような氣骨きこつを見せる事がある。今がまさにそうだった。

ラルファスは、一歩も退ひかぬ構えで続ける。

「これから戦いだというのに、お味方を斬きってなんとします。今少しお考えください」

鼻白はなしろんだ王に代わり、反撃は他から来た。

上將軍じやうしゆんの一人ガノアが、瘦けた頬をひくつかせ、得意気に発言したのだ。

「ラルファス殿、いかに友を庇かばうためとはいえ、その行いはあまりに陛下の意志をないがしろにすぎでは」

——要するに、「黙もって見てろ！」と言いたいのだろう。

横で同僚のギレスがしきりに頷うなづいている。こちらは、細身で氣取った顔のガノアと対照的に、樽たるのように太った男だ。どちらも貴族意識が強く、レインとの仲は最悪である。

ちようどいい、レインが斬られて死ぬばいと、密かに熱望していたに違いない。ラルファスは貴族も貴族、王家の遠縁に当たる大貴族だが、昔からこの二人が嫌いだっただ。

「愚おろか者！」

びしりと言い切る。

「ここでレインが死んだところで、喜ぶのは敵だけなのだぞ。それがわからないのかっ」

ガノアはむっとしたように何か言い返そうとしたが、ラルファスの瞳を覗き込み、開けた口を閉ざした。ギレスも同様である。

ダグラス王もまた、苦々しい顔付きで剣を鞘さやに戻す。今のセリフが、自分に当てつけられたように感じたのだろう。のしのと玉座ぎょざに戻り、忌々いまいましそうにラルファスとレインを見た。

「まあよい。こやつを斬きったところで、せんないことだ」

「そうそう」

他人事のように、軽い口調の合いの手を入れるレイン。

王の眉間に、深々と縦皺が刻まれた。

おまえは黙っている、ラルファスはレインを片手で制す。友と並んで跪いた。

「陛下、お聞き届けいただき、ありがとうございます」

「……だが、こやつは兵を率いず、手ぶらでここへ来た。命令無視は命令無視、今後の事もある。全く罪に問わない訳にはいかんぞ」

「それはそうですが」

困ったラルファスは隣を窺ったが、レインは人ごとのようにこちらを見返したただけだった。自分の事だというのに、まるで真剣が見受けられない。

仕方なくラルファスは、

「陛下、それではレインには謹慎をご命令あればいかがでしょう」

「謹慎とな」

「はい。この戦にはどのみち間に合わないのですから、それが適当かと」

「むう……」

ダグラス王は濃い鬚を擦り、いかにも渋い顔をした。気に入らないのだが、ラルファスが有力な大貴族のため、無下に反対もできないのだった。いくら王とはいえ、筆頭貴族のラルファスには一目置いている。

「いささか、軽い処罰のように思うが」

ぶずりとそれだけを言う。

「それでもありません」

ラルファスはすかさず、自分でも信じていない事を進言する。

「陛下が軍を率いてザーマインを打ち破り、見事凱旋なされば、レインも己の不明を悟らずにはいられませんまい。我らに対しても面目を失うこととなります。名誉ある騎士にとって、これほど辛い処罰はありませんまい」

騎士の名誉など、レインは鼻歌交じりでそこらに捨てそうだが、ラルファスはあえてそう言った。

「むう……それは、な」

「であります。陛下、ご決断を」

促され、王は砂を噛んだような表情で告げた。

「まあよかろう。ではレイン、領地にて謹慎を命じる。この程度の処罰に止め置いた事を、感謝するのだな！」

「ははっ。まことに有り難き幸せ!!」

素晴らしく明るい声で、レインは形だけは恭しく頭を下げた。同じく頭を低くしたラルファスが横目で見ると、あろうことか不敵な微笑とともに片眼をつむった。

まさか、全部計算ずくだったのか。だとすればしょうがない奴だ。

ラルファスとしては、苦笑する他はない。

だがまあ、親友が無事でいてくれるのならそれに越したことはないだろう。この戦いには、どう考えても勝ち目はないだろうから。

この時、ガノアとギレスの二人がラルファス達を冷たい目で見つめていたのだが、幸か不幸からラルファスは気付かなかった。

その後はさしたる意見も出ず、すぐに軍議は解散となった。

ラルファスはレインを、城内の自室へと誘った。

これから戦いとなれば、下手をすると今生の別れとなるかもしれない。

「一杯やるだろうか？」

「ああ、いいな」

爽やかに笑うレイン。

私室に入ると、レインがどかりとソファーに座った。長い足を高々と組み、早くもくつろいでいる。

ラルファスは、本棚に埋もれたようなキャビネットから、酒の瓶とグラスを取り出し、たつぷりと注いでやった。それから自分も向かい側に座る。

注がれたそれを一息で飲み干し、レインはすぐに自分でおかわりを注ぐ。いつもながら豪快な飲みっぷりである。ラルファスは自分のグラスをゆっくりと傾けつつ、目を細めて正面の友の顔を眺めた。

若々しいその顔は、初めて顔を合わせた頃と何ら変わらない。とにかく、自分と同じ二十五歳にはとても見えない。せいぜい、十八〜二十くらいだ。

祖先はエルフではないかという噂のある、この国の貴族の血筋であるラルファスも、普通の人間より遙かに寿命が長く、従って老化も遅いのだが、この友はどのような理由でだろう。

思えばレインについて、自分はなにも知らないも同然なのだ。

と、そのレインがいきなり言った。

「ところで、さっきは悪かったな」

「なにがだ？ もしかすると謹慎のことか？ なんだ、やっぱり私の仲裁を当てにしたのか」

「ああ、予定に入っていた」

「それならそれで、教えておいてくれればよかったのだ。私が陛下をお止めしなれば、おまえ、どうする気だったんだ」

「おまえは必ず止めてくれると信じてたさ。第一、腹芸ができない奴にそんなこと言えるもんか」

「ふむ。それもそうだ」

ラルファスは深く納得した。確かに最初から聞いていたら、自分はおそらく顔に出してしまつて

いただろう。

「しかし、おまえがそこまで戦を避けるとはな。今度の遠征、それほど勝算なしと見たか」

「このままじゃ小指の先ほどもないな、勝算なんか」

実に気安く保証してくれた。

「こりゃ、完全にザーミンの罠だぜ。行軍速度がやたらと遅いのも、わざとに決まってるね。あの程度まで懐に誘い込んだ後、袋叩きにするつもりだ」

「……そうかもしれないな。だが、それならどうすればよいと思う？ 放っておいたところで、彼

らはいつかは攻めてくるのではないか」

「サンクワール領で迎え討てばいい。ただ、作戦は俺がおまえが立てて、しかも戦の指揮も俺達のどちらかが取る必要があるが、な」

「それは……しかし……」

ラルファスは顔をしかめた。

ダグラス王は、自らの作戦方針に口を出されることを極度に嫌がる。他のことならまだしも、この戦いに関する限り、ラルファスの意見ですら聞こうとはしない。

「無理だろうが？ ならどうしようもないね、終わったね。単純に数が物を言うのが、この世界の戦だからな」

「——そうだな」

最後は妙な言い方だが、レインの言い分はわかる。

その分析は、冷徹だが正しい。ダグラス王は個人的な武力はともかく、大局を見据えた戦略を練る能力は乏しいのだ。どう考えても、先は見えている。

「とにかくだ。俺は、陛下のために命を投げ出すような殊勝な性格してないしな。柄じゃないんだ、勝てないけど特攻とか」

ラルファスは黙したままグラスを傾けた。

口は悪くとも、少なくとも間違ったことは述べてない。

王は、無茶な命令でレインを何度も窮地に追いやったし、そんな主君に彼が身を捨てて仕える方が不思議だ。

第一、元々傭兵上がりの彼には、この国に対する忠誠心などさしてない。ことによると全くないのかもしれないのだ。

しかし、人はそれぞれだ。踏みとどまって戦う愚か者がいても、それはそれでいい……
レインがじっとラルファスを見る。

「……遠征に加わるのはやめとけ、と忠告しても無駄だな、その顔つきじゃあ」

「ああ。心配してくれるのは嬉しいが」

「——別に。色々たかるとか相手がいなくなるのが、残念なだけさ」

「そうか」

ラルファスは静かに笑った。

最後に酒の残りをぐつとあおり、レインは思い切りよく立ち上がった。

「さて。そろそろ俺は行くぜ。何しろ謹慎だしな」

「うん。いいか、くれぐれも気をつけるんだぞ。おまえには無用の言葉かもしれないが」

「いや、おまえの方だろ、気をつけないといけないのは」

一瞬だけ、薄皮が剥かれるようにレインが内心の危惧を覗かせたが、たちまち元の平静な表情に戻った。

湿った感情など微塵も見せず、まるでちよつと中座するだけといった態度で外に出る。ラルファスは彼を見送ろうと、一緒に廊下に出た。

「そうだ」

立ち去ろうとしたレインは、ふとなにかを思い出したように、

「前から聞こうと思ってたんだが、おまえ、ミシエールって女の子を知ってるか？　いま十六歳くらいで、貴族の血筋らしいんだが」

「ミシエール？　さあ……名前以外になにか特徴はないのか」

「そうだなあ。こう腰までの長い真っ直ぐな金髪で、ちよつと信じられないようなきれいな顔をしているな……声もいい」

「そんな特徴ではちよつとな。貴族は大勢いるんだ」

言いながら、ラルファスは少なからずあきれた。

「しかし、幾らなんでも年齢が開きすぎではないか。男女のことは、確かに私にはよくわからないが……」

「違う違う！　別にそんなんじゃない。そんな趣味ないし。ただ、ちよつと約束がな」

「約束？」

「いや、知らなきゃいいんだ。会えそうな場所はわかってるしな」

レインは手を振ると、何事も無かったように身を翻し、歩き去った。
最後まで一度も振り返らなかった。

自室に戻ったラルファスは、去った親友のことを思い、一人で飲み直した。

これからの不利な戦を思うと、余程の運が自分になれば、再びあの磊落な男には会えないだろう……

トントン。

じつと考えに沈むラルファスの耳に、やけに遠慮深いノックの音が聞こえた。この控えめな感じは、副官のグエンではあり得ない。

「はい。これは——王女様っ！」

無造作にドアを開けると、そこにはシエルファ王女がちょこんと立っていた。腰まで伸びた真っ直ぐな金髪。そして、透き通るように真っ白な肌。人一倍大きな瞳は、見る者をぞくりとさせるほど可憐で、澄み切っている。

今日はいつもの寂しそうな表情ではなく、なぜかとても嬉しそうだった。

反射的に片膝をつこうとするラルファスを、小さな手で押しとどめる。

「おかまいなく、ラルファスさま。あの……ちよつとよろしいですか」

「もちろんです。どうぞ」

ラルファスは戸惑いながらも王女を招き入れた。王女は相当な人嫌いと聞くが、自分になんの用だろうか……

今年で十六歳になる王女と、実はラルファスはあまり面識がない。

せいぜい、宮殿内で何度かすれ違った時に会釈したぐらいだ。別にラルファスが意図的に避けているわけではなく、元々王女は、いつも宮殿の奥の自室に籠もりっぱなしなのだ。

ただ、それは彼女の意志というわけではなく、どうやら父親のダグラス王の指図らしい。ともあれ、彼女のこの訪問は意外だった。

ソファーに座った王女は、物珍しそうにあちこちを見渡している。

「それで、どのようなご用件でしょう」

「はい……あの、ラルファスさまがレインのお友達だというのは本当ですか？ 侍女からそう聞き

ましたけれど」

「……はい、確かに彼の者は私の友ですが」

レインを呼び捨て？ 随分親しそうだが。

ラルファスの戸惑いはさらに増大した。

「では、レインの居場所をご存じありませんか。今このお城に来ているはずなのに、どこを探しても見つからなくて」

多分、ラルファスが珍しいこともある、という顔をしていたのだろう。

シエルファは小声で付け加えた。

「お父様には内緒なんです。こっそり部屋を抜け出してきたんです。レインに逢いたくて」

「——なるほど、レインに」

そう答えるしかなかった。

身を乗り出した王女の美しい顔が、微かに紅潮している。誰が見ても、彼女にとってレインが非常に大切な存在なのだとわかる。

あいつ、いつの間にかこの方と知り合つたのやら。

不思議である。そもそもレインは、ほとんどこのガルフォート城に寄りつかないのだ。

「あいつは先程までここにいたのですが……残念ながら謹慎中のため、居城へ帰りました」

「えっ……」

シエルファ王女の顔色の変化は、見ていて気の毒になるほどだった。ラルファスはこの少女が、失望のあまり泣き出すのではないかと心配になったくらいだ。

「仕方なかったのです。それに彼のためにはその方がよかったのかもしれない」

同情したラルファスは、シエルファに口止めをした上、今日の軍議の模様を詳しく話してあげた。レインの狙いも含めて全部をだ。

「そう……ですか。レインがそんな手段を取るということは、この国はもう絶望的なのですね」

王女の口調には、レインへの無限の信頼が込められていた。

「認めたくはないのですが」

「そうですね」

そっと吐息を吐き、なぜか王女は、白いローブの胸元からペンダントを引き上げ、じっと見つめた。銀の鎖の先に古ぼけたコインが穴を開けて通してある。

ラルファスの視線に気付くと、そのコインを白い手に乗せ、こちらに見せてくれた。

「ラルファスさまはレインのお友達だから、特別にお見せしますね。レインにもらったこのコインは、わたくしの宝物なんです」

「恐縮です。随分と古い物のようですね。あまり装飾品には見えませんが」

それは古いというより、汚いといった方がより正確だった。銀貨に見えるが、おそろしく汚れた表面に、なにかびっしりと彼の知らない言葉で字が彫つてある。

「これは魔法のコインなんです」

「魔法、ですか」

「ええ。約束なので、どんな効果があるのかはお話し出来ませんが、つらい時にこのコインを見ていると、わたくし、いつも元気が出るんです。ただ、魔法の効果を発揮するのは、一度だけらしいですけど」

魔法の品、つまりマジックアイテムは、今の時代には大変な希少価値がある。物に魔力をチャージ出来るルーンマスターが、もうほとんどいないせいだ。

だがしかし……ラルファスは嫌な予感がゾワゾワと背中を走るのを感じた。

実は魔法の品なら、かつてラルファスも譲られたことがあるのだ。

それはまだ、ルナンとの戦いが続いていた頃のことである。王より出撃を命じられたラルファスは、出立の前夜レインと飲んでいた際、いい物をやると言われた。

「いい物？」

「ああ。これは俺が『大陸北部地方』を旅していた頃に、偶然ある遺跡で見つけた物だがな……まあ、見てくれ」

もったいぶって出されたのは、どう見てもただの石ころだった。ただ、ちょっと緑がかってはいるが。

「ふむ？ 私にはただの石にしか見えないな」

「あー、これだから素人は……。これはな、一度だけしか効果がないが、持ち主の命がヤバくなった時に、その危険を肩代わりしてくれる。ほんとだぜ、嘘じゃない」

「ほう！」

すっかり感心して唸るラルファス。

「用心のために、おまえにやる。今度の戦いに持つていけ。いい、いい。遠慮すんな。その代わり、ここはオゴりだぞ」

言いながら、レインはもう一度、効果のほどは嘘じゃないぞと念押しした。

ラルファスは深く感謝してその魔法の石をもらい、戦地へ赴いた。

実際、その石は役に立ったように思えた。

激しい戦いの最中、彼の首筋を敵の矢が貫きかけたのだ。が、わずかに首に赤い筋を付けただけで難を逃れることが出来た。その後例の石が消えていたので、すっかりそのお陰だと思っていたのだ。

ところが、帰国してから酒席に招いて丁寧に礼を述べたラルファスに、レインはあっさりと言ってくれた。

「ああ。ありやただの石だ。俺がそこらの道端で拾った、な」

「……なんだって」

「ああ、怒るなって。何となく心強かったろうが。戦いはほら、気の持ちようが肝心だからなあ。いやー、よかつたなあーハッピーだなー」

景気よく背中をぶっ叩かれ、ラルファスは飲んでいた酒を吹き出しかけた――

以上のようなシビアな過去を思い出し、ラルファスは思わず喉を鳴らす。

幸せそうに微笑んでいる王女に、恐る恐る尋ねてみる。

「時に王女様、レインはその銀貨についてなにか申しておりませんでしたか」

王女は何度か瞬きを繰り返してから、

「そうですね……レインは次元の向こうの世界をも見てきたようですが、この品に関しては、『大陸北部地方』を旅していた時に、偶然ある遺跡で見つけた物――だとか」

「そ、そうですかっ」

あいつめ！

ラルファスの首筋に冷や汗が浮く。

苦悩する彼には気付かず、実に嬉しそうに王女が続ける。

「レインったら、おかしいんですよ。わたくしは少しも疑っていないのに、嘘じゃないからなっ、て何度も言うんですもの」

「は、はあ……それはおかしいですね……はは、ははは」

上品に手を口にやり、王女は微笑んでいるが、ラルファスは少しもおかしくない。今まで飲んだ酒が、全部、汗になって流れてしまった。

とにかく、さっさと話題を変えることにする。レインにまた会うことがあれば、その時に聞いただそう。

「まあどのような効果があるにせよ、一度きりの効力なら、使わずに大事に取っておくべきでしょう」

「はい、わたくしもそう思います」

「安堵しました」

「えっ？」

「——い、いえ。そう、それより王女様、ミシエールという名前に心当たりがありませんか」

話を変える為は何気なく出した名前なのに、王女は驚愕の表情で腰を浮かせた。

「どうしてその名を？ レイン!? レインから聞いたのですね」

その迫力に負けて顔顔をいてしまい、ラルファスは凍りついた。王女がレインに好意を寄せているのなら、ここで女性の名前など出すべきではなかったのだ。

ところが予想を裏切り、王女は花が開くように微笑んだ。ほっそりした手を組み合わせて、夢見るように言う。

「レインが、ミシエールのことを気にしていたのですね、ラルファスさま」

「は……ま、まあ。知らないかと聞かれたんです。それだけで……」

王女はろくに聞いてもないようだ。頬を染め、そうですか、レインが……などと呟つぶやいている。完璧に、夢見る乙女の顔になっていた。多分、もはやラルファスなど目に入ってもいまい。

やはり私には、女性のことはわからない。

ラルファスはしみじみと思った。



低音の効いた歌声が、風に乗って流れてきていた。

ユーリはもう何度目かになるが、石でもぶつけてやろうかと馬上から地面をキョロキョロし、結局は任務のためにぐっと堪こらえた。

青色のブラウスに白いスカートを穿いた、十六、七の少女である。

肩先できれいに揃そろえられた手入れのいい黒い髪。リスのようによく動く薄緑の瞳が、勝ち気な光を放っている。大抵の男がかわいいと認める顔立ちだが、今は内心のいらだちのせいで、愛らしさは随分とダウンしてしまっていた。

——もうっ、いつまで下手クソな歌を歌ったら気がすむわけ、あいつっ。おまけに、この寒いのにシャツとズボンしか着てないし。変人よ、変人！

この世にこんな音痴おんちがいるのか！ と度肝どぎんを抜かれるほどのひどい歌である。なにやら男と女の恋の物語が歌詞になつていようだが、はつきり言つてただの騒音さわおんにしか聞こえない。

というか、聞いていると、自分の寿命がどんどん縮まちぢつていく気さえする。それくらい、ひどいのだ。

ユーリは耳を塞ふさぎたくなるのを我慢しながら、馬で一定の距離を保ち、歌い手の後をつけていた。その男——この国の上將軍じょうぐんであるところのレインは、ザーメインでは「知られざる天才」と呼ばれている。

まあ今は結構有名なので、そう呼ぶ者は少なくなつてはいる。にしても、彼が他国で高く評価されていることは間違いない。武名ぶめいが天下てんかに轟とどろいているのだ。

実際ユーリも、この目で見えるまでは大変緊張きんじやうしていたぐらいだ。もはや、そんな気持ちは欠片かけらも残のこっていないが。

こんなの、もうさつさと放はなつて帰りたい——そう思うのだけれど、宰相さいしやうの命令ともなればそうもいかないのだつた。

はあつ、とユーリはため息を吐つく。とにかくなかがあろうと、当分は嫌でもこの男についていくしかない。

ユーリの気持ちなどにはまるで頓着とんちやうせず、やけに毛並みのよい白馬まがに跨またつたレインは、われ鐘かねのような声で歌を歌い続ける。

周りは商店が建ち並ぶ王都の中心街だというのに、気にする様子はまるでない。大通りを歩く人々の失笑しせうなど、完璧に無視むししきつている。ある意味では大物かもしれない。

ただし、ユーリは一ミリも関わり合いになりたくないが。

今も、道行く人に間違つても知り合いだと思われまいよう、可能な限りレインと距離をとっている。あんなの他人たにんですから。

と……レインがいきなり殺人的な歌を中止し、何事か呟つぶいた。ユーリが必死で耳をすませたところによると、

「どうだ、腹は減へつてないか、クリス？」

と言いつているようだ。

うんざりして天を仰いだ。

散々同じことを聞かされたので、もう、「クリスつて誰よ？ 誰も居ないじゃん！」などと文句をつけたりしない。

ここまでの道中で、クリスとは彼が跨またっている馬のことだとわかった。つまりあのレインは、い歳としをして馬と話し込む趣味があるらしい。

難儀なんぎな奴やつである。

なんであしたが、こんな「使えない尊倒れの奴」を尾行おひぎやうしなきゃいけないのだろう……

いくら話しかけても無駄なのに、レインはしつこく馬に話しかけている。と、偶然に決まっ

るが、馬が軽く首を振った。
途端に、満足そうに頷くレイン。

「そうかそうか、メシは後でいいのかクリス」

何事もなかったように、また殺人的な歌を歌い始めた。

ユーリは思わず、小声で呪い文句を吐いた。こんなに任務が疎ましく思えたのは、初めての経験である。

歌だけの問題ではない。

だいたいレインは上將軍という要職にあるくせに、そこらの田舎者のごとく、やたらとあちこちの店を覗きまわることだ。どうも店員が女性（それも美人の）であればあるほど、興味を示すようだ。必ず、一言二言話しかけるまで動かない。

女たらしの頭の弱い馬鹿ね、こいつっ。

ユーリのレインに対する評価は、だだ下がりに下がる一方であり、もはや回復の見込みは有り得なかった。

と、急にレインがとある酒場の角を、ひよいと曲がった。

まあたそういう気まぐれを起こすっ。

ユーリは距離を詰め、急いで自分もその路地を曲がった。

「――！ ああっ」

危うくレインにぶつかるところだった。

とうに先を進んでいるはずの彼は、馬を降りて酒場の壁にもたれている。そしてユーリを見るなり、お気楽に片手を上げて見せた。

「よう！ ちょっと話さないか」

しまった！ まさか尾行が……ううん、まだなんとかなるわっ。こいつ、馬鹿だし。

目まぐるしく顔色を変えた後、ユーリは表情を調節し、大急ぎでうぶな少女のそれに変えた。大きく目を見開いて、

「えっ。誰かとお間違えでは、騎士様？」

「間違い……ねえ」

レインはじろじろとユーリを観察し、わざとらしく肩をすくめた。

「ま、間違いでもいいさ。ちょっと馬を降りてくれないか。話したい」

わずかに迷ったが、ここで怪しまれてはいけない。結局、渋々と馬を降りた。

「それで、なにか？」

「いやなに。おまえが『偶然』にも、俺を城からずうつとつけてくる理由が聞きたくてな」

偶然、の部分に力を入れて話すレイン。

ユーリはぐつと詰まった。ただの抜け作だと思っていたのに、相手はなんとガルフオート城から

こつち、ずっと尾行に気付いていたらしい。それでは偶然で片づけるのは無理がある。や、ヤバいかも……ユーリは汗ジツで、次なるごまかしを模索した。

「え、えーと……こうなったら正直に申し上げますけど、あたし、実は一目見て騎士様に心を奪われまして、フラフラと後をお慕いしていたんですの」

歯が浮くのを我慢して、ユーリは一気に捲し立てる。レインが、ほおつ、俺に一目惚れねえと言っ
て笑った。ユーリもお追従でえへへ、と笑った。

ひとしきり二人で笑った後、ぴたりとレインが笑い止み、断言した。

「嘘つけ、こらっ」

「ええっ。本当ですよおっ。その真つ黒な格好がなんともはや」

「まだ言うか、こいつは。いいか、確かに俺はかつこいい」

自意識過剰の馬鹿、とすかさずユーリは内心で評価に加えた。

「だからといってなあ、そんな見え透いた言い訳は納得できないねっ」

「えー、ほんとですってばっ。私はあなた様にすつかり……」

パツとレインが片手を上げ、ユーリは口を閉ざした。わざとらしいため息を吐いた後、レインはいきなり核心をついた。

「あくまでシラを切るなら、しょうがないから俺が言っつてやろう。おまえの正体は、ザーマインの間諜だろう？ 正直に認めろよ」

バレてるっ！

そう思った瞬間、ユーリはスカートの後ろに隠した短剣に手を伸ばし、後方へ跳躍しようとした。逃げ足の速さなら自信があるし、仮に戦いになったとしても、そこらの並の騎士よりは遙かに戦えるつもりだ。ザーマインで受けた訓練は伊達ではない。

とにかくユーリは、今の今までそう思っていた。

——だが、あいにく跳躍するどころではなかった。

微かな剣風と共に、黒影が残像を生じつつ動く。

光の軌跡が鮮やかに半円を描き、青き光芒がユーリの視界をふさぐ。

気がついたら、動けなくなっていた。

手を腰の方へ伸ばすか伸ばさなにかのうちに、抜く手も見えない速さで、喉元に剣を突きつけられていたのである。

それもただの長剣ではない。光り輝く魔力のオーラを放つ、魔法剣……魔剣である。

その刀身には、うねるように青白い光が乱舞し、ブウウウウウンという多数の羽虫が立てるような音が聞こえる。

物凄くよく切れそうだった。とにかく自分の身体で試すのは絶対に嫌だ。

ゴクリ、とユーリの喉が鳴った。

「う、嘘っ。なんて速いの」

「当然だ、俺は天才だぜ」

片手でえらそうに髪をかきあげるレイン。無性にむかつくが、今は反論できない。加えてクリスとかいう名の駄馬が、こつちを馬鹿にしたように見るのも腹が立つ。

まあ、これは偶然だろうが。

「な、なんで……」

「なんでバレたかって？ そりやおまえ、俺は人の気配には敏感だから尾行なんて通じないし、それにおまえの足の運びは、普通の娘とは思えないしな」

「ううっ」

「ふっ。まあこの俺の目を誤魔化すには、二十年早かったってことだ」

言いたい放題である。ユーリは殴ってやりたくなつたが、今はそんなところではない上に、命を無くすおそれすらあつた。

間諜かんていというのはどの国でも嫌われ者なのだ。捕まればまず死刑だ。それどころか、たいがいは見つかつたその場で斬り殺されることになる。つまり、非常にヤバイ。

大変だっ。あたしが死んだら、妹の面倒は誰がみるのっ。なんとかならないかしら、なんとか！ 助けてって頼めば……ああっ、でもでも、代わりに抱かせるとか言われたらどうしよう。こいつ、

頭が弱くてスケベそうだし。

ユーリが悶々もんもんしていると、レインがのんびりとした口調で問うた。

「それで。おまえ、名前は？」

「……ユーリです」

「ユーリか。まあまあかな。ちよつと雰囲気がつつそうなのがアレだが」
大きなお世話だっ、とユーリが思っていると、レインは続けて年齢も尋ねてきた。

今更隠しても仕方ないので、十六歳、と魔剣から目を離さずに答える。レインは顎あごを撫なでつつ、残念だが守備範囲外だなあ、などとぬかした。心配せずとも、ユーリだつてお断りである。

「まあ、今度からもうちよい短めのスカートをはくようにな。股下スレスレのヤツをな」
あっさりとしてレインが魔剣を鞘さやに収めた。

ユーリがポカンとしていると、鼻歌を歌いながら自分の馬の方を向く。

「クリス、もう少しでメシにするからな」

「……ちよつと」

「そうだ、なんなら町外れの宿屋でぱーつといくか、クリス」

「……あのさあ」

「そうかっ。おまえも賛成か。よしよし、腹一杯食わせてやるからなっ」

ユーリは大きく息を吸い込み、全力で怒鳴った。

「こらあああつ！ 馬と話してないで、あたしの話を聞けえつ！」
「おおっ」

ぎよつとしたようにレインが振り向く。

黒瞳くろめが大きく見開かれていた。

「おまえなあ、急にでっかい声だすなよ。俺は美声を好むんだぞ」

「なにが美声よつ。あ、あんたねえつ、人がいつ斬られるかと身が細る思いで震えているのに、呑気に馬と話してんじやないわよつ」

「いつ震えてたんだよ、いつ。しぶとく逃げるチャンスを窺うかがっていたくせに。俺から逃げようなんて五十年早いっつのに」

憎たらしい口調でレインが言い返す。

さりげなく、さつきより三十年増えているのが腹立たしい。

「だいたい、顔も近くで見られたしもう用はすんだんだから、とつとどつか行けばいいだろう。しっしっ」

蠅でも追うように、ヒラヒラと手を振る。

間近で顔を見るために足止めしたのか、あんたはつ。ユーリはまた怒鳴り返そうとして、はつと口に手をやった。

「え……ひよつとして、逃がしてくれるの」

「おまえを殺したつてしょうがないじゃないか。次に別の奴が来るだけの話だろう？ それこそ、斬るだけ無駄だ」

「そ、それはそうだけど……逃がしてくれるんだ」

こいつ、思ったよりいい奴かも。

ユーリは大いにレインを見直した。普通は絶対に殺されるし、そうでなくても役人に突き出されて、やっぱり殺される。

全然顔とか見ていなかったが、ところどころ跳ねた漆黒の髪に、彫りの深い精悍せいかんな顔立ちをしている。特に黒瞳くろめがやたらと印象深い。森林狼しんりんろうもかくやというほど鋭いのだ。

うん、ハンサムかも——て、それどころじゃないわつ。

肝心かんじんな点を思い出し、ユーリはまたどつと暗くなった。

命が助かったのはよかったが、レインを尾行するという任務は失敗したのだ。これはこれでまずい。下手をするとザーマインに戻ってから、なにか罰を受けるかもしれない。首になることもあり得る。

「どうした？ また暗そうな顔して」

レインが馬上から訊きいてきた。

はつといてと言う代わりに、ユーリはボソボソと事情を話した。一応は命の恩人だし、それに、話さずにはいらなかったのだ。

と、レインは話を聞いた後、「なら、俺と一緒に来ればいいだろう」
驚いたユーリは、ぼつと顔を上げた。

「だから、任務があるんだろう？俺と一緒に来れば問題ないじゃないか」

「えっ、えっ。だってあたし、情報収集が目的だよ？一緒にいたら、あなただって困るでしょう？」

ユーリが目を丸くして言うと、レインはフツと気障きざに笑った。

「別について来られたって俺はなんにも困らないね。だって俺、謹慎きんしんになって領地に帰るとこだし」

「……はい？」

「だからっ、謹慎きんしんなんだよ、きんしんっ」

嬉しそうに教えてくれるレイン。

「兵を率ひいずに一人で登城してだ、『戦つても勝てないからやめましようや？』とか進言したら、めでたくそうなったのさ。これから自分の城に帰って寝るんだって」

どこまでも爽さわやかに笑うレインを、ユーリは信じられない思いで見つめた。名誉を重んじる騎士が、ヘラヘラしながらのたまうセリフではない。

「い、行きも帰りも一人だから、おかしいなと思ってたら……」

頭が痛くなってきた。

やっぱりこいつ、ただの馬鹿だわっ。

「で、ユーリ。どうすんだよ、俺について来るのか？」

レインの声が遠くから聞こえる。

一人で帰れっ、と返してやれないのがつらいところだ。あいにくユーリに選ぶ権利などないのだ。

「ううっ、一緒に行きます……」

半泣きになってユーリは答える。

絶対に偶然に決まっているが、クリスがユーリをあざ笑うかのようあざに嘶なげいた。



凍こてついた空気の中に、木々のむっとする匂かいが微かかに混まじり始はめている。

レインの領するアステル地方へは、王都から馬の足で三日かかった。

要するに、まごうことなき田舎である。というか、ド田舎。

それでも、貴族でもない平民が領地持ちの上将軍じやうしゆんというのは、この国ではレインだけである。ダグラス王は身分にはすこぶるやかましいからだ。

辺りは枝の長い南部杉が生い茂る、ちよつとした森だった。アステル地方はほとんど、なにもない平原か、こんな森ばかりだ。

その中にポツポツと、村や町が点在している。まさに田舎以外の何ものでもない。

「もうすぐ俺の城に着くが、わかってんな？ おまえは騎士見習いってことになってんだから、みんなの前で俺とタメ口きいたりするなよ。ボロはだすな」

「そりゃまあ、うん」

誰が見ても気が進まなそうに、ユーリは頷いた。

打ち合わせで、レインとユーリは父親同士が知り合いだということにしたのだ。つまりユーリは、騎士になるべくレインに預けられた……という設定だ。

女性の騎士も数は少ないながらもちゃんといるので、これはそんなにおかしい話ではない。現に、レインの二人の副官のうちの一人は、確か女性である。

「なんだ、そのふてくされた顔は。おまえのために言っただぞ。誰もいないところならタメ口でもいいって言うてるんだし、感謝してほしいくらいだ」

「そりゃ感謝するけどお……あたし、敬語って苦手なのよね」

「しょうがないだろう？ おまえが俺と離れたくないってきかないんだから」

「うっ。い、嫌な言い方しないでよっ」

「だが事実だろ」

涼しい顔でレイン。

眉間にしわを寄せて黙り込んだユーリを見てにんまりしたが、急にふっと渋い表情になった。

「どうしたのよ？」

「いや、口くでもないことを思い出した」

「だから、なに？」

「セノアだよ、俺の副官っ。よく考えたらあいつ、俺が謹慎だつて聞いたらまたうるさいだろうなってな」

「セノアって……確か、五家の一角を占める、有力貴族の娘だったわね。二十歳くらいだっけ」

ユーリが小首を傾げると、レインは、さすがによく調べてあるなあ、妙なところで感心した。

「まあ、それが仕事だから。それで、そんなにうるさいの、その人」

「そりゃもう、やかましいのなんのつて。美人でスタイルも抜群なんだが、その美点を帳消しにしてあまりあるな。つたく、半年前に俺を訪ねてきたときは、拾い物だとおもったんだがなあ」

「あんた、言葉の使い方、変よ……」

「いいだろ、別に。それより、もうすぐ城が見えるぞ。ここを抜ければほら！」

丁度、森が切れて、視界がぱあっと開けるところだった。ユーリが目を凝らし、レインが前方を指さす。

……だが、その差した指が固まった。

ユーリもまた、口をポカンと開ける。

「どうなってるんだっ」

「どうなってるのっ」

二人の声がきれいに重なった。



コートクレアス城は、レインが城主を務める城で、小さいながらも周りを深い堀が囲っており、城壁も高く、防御力はなかなかのものである。

いくつかの尖塔が立ち、それらの塔と外壁は、見栄えのいい白色が塗られている。

城門は跳ね橋がついていて、今その橋は下ろされていた。

それはいい。

問題は、城門前の広場にあった。

そこは、駐留する騎士や歩兵を合わせた二千の兵が、勢揃い出来る広さである。

いざ戦ともなれば、この場所で隊伍を整えてから出陣するのだ。

その広場に、ぎつちりと兵が集っていた。歩兵から騎士見習い、そして騎士まで、およそこの城の全兵力に当たる人数だ。

その全員が、鎧などをぎつちりと纏い、槍や剣で嚴重に武装していた。まるで、すぐにも出撃しそうである。

しかも、これでもまだ足りないのだというように、城内から武器や糧食を満載した荷車がどしど

しと広場に持ち出されている。

不思議なのは、みな黙々と作業を続けながらも、どこか疲れた態度でいることだ。

「だましたわねっ」

いきなりユーリがキンキン声で喚いた。

レインはギギイと音がしそうなほど、ぎこちなく首をまわした。

「あれはなにっ、出撃の準備じゃないっ。なーにが謹慎よっ、嘘はつかついてっ。あんた最初から適当なこと言っつて、どっかに閉じこめてあたしをもてあそばうとこんな」

「やかましいっ、愉快なエロ話をつくってんじやない！」

レインはたまらず、ユーリを遮った。

「おまえ一人を押し倒すのに、誰がそんなめんどくさい嘘なんかつくかつ。頭を冷やせ、馬鹿っ。俺だつてなにがなんだかさっぱりなんだよっ。焦ってる真っ最中なんだっ。わかったか！」

わからなかつたらしく、即座に大声で喚き返された。

付き合っつていられないので、レインはわざとらしく両手で耳を塞ぎ、足で合図してクリスを進ませた。

とにかく、この原因を問いたださなければならぬ。

大急ぎで広場に近づいていくと、レインの姿を見つけたのか、集団の中から鎧を纏った男が一人、カシャカシャと音をさせながらこちらへと駆けてきた。

短めの金髪に青い瞳……ただしその瞳は貴族のそれと違い、白目の部分はちゃんと白くなっている。顔立ちは整っているが表情がどこか幼く、なんとなく頼りない感じである。

レインのもう一人の副官、レニだ。本当はレルバイニが本名なのだが、レインは面倒くさいので縮めてレニと呼んでいる。なお、副官二人は、いずれも千人隊長である。

ともあれそのレニが、もうそろそろ寒い季節だと言うのに、額の汗を手で振り払いつつ走ってくる。目がキョトキョトと落ち着かないのが、非常に怪しい。

「おい、レニ！ どうなってる？ ひよっとしてザーメインか。奴らがそこまで来てるってことか、おいっ」

慌ただしくレインが聞いただと、レニはなぜかレインの顔を見ないようにしながら、つらつらと言い訳を始めた。

「自分はずね、やめとこうって言ったんですよ。それは気が早いだろうって」

「……は？ なに言ってるんだ、おまえ」

「い、いや。だからです、自分はちゃんと止めたんですよ。こういうことは、将軍が帰ってからのことだって」

さっぱりわからない。

いらだったレインはクリスから降りると、レニの肩を掴んで揺さぶりまくった。

「こらっ。おれにわかるように話せよっ」

「いやっ！ ですからあ、自分は悪くないんだってことさえご理解くだされば……あっ」

しどろもどろなレニは、しかし、カポカポと馬を進めてやってきたユーリを見て、あっさりど注意がそちらへ飛んだ。

「将軍っ。そのかわいらしい女性はどなたですか？」

「こら、今は俺の質問が先」

「ああ。かわいいなんてそんな……」

ぶりっこ風に頬を両手で挟んだユーリが、レインを無視して照れて見せた。どうやら誤解は解けたらしく、もう機嫌は直っている。

「あだし、父さんの紹介でレイン将軍の元で修行しろって言われたんですよ。ユーリって言います。よろしくう〜」

とろけそうな声音で愛嬌を振りまくユーリを、レインは苦々しく遮った。

「こらこらっ。手を振るな、手をつ。ってレニ！ おまえもでれっとしてんじやないっ。さっさと事情を説明しろって！」

だがレニはあまり頼りになりそうもなかった。笑顔のユーリにデレデレし、すっかりグニャグニャになっている。なら他の奴に聞くか……とレインがあきらめて広場の方へ視線を投げると、丁度その集団が二つに割れ、なにか面妖な物がヨロヨロとよろめき出てきた。

それは一言で言うのと、鎧の固まりだった。

白銀に光る重装備の鎧で、足下から頭の先まで固めている。ただ、あまり体力がないのか重い鎧を扱いかね、足下が実におぼつかない。あれではいざ戦いになれば、真つ先に敵の槍のいい餌食になることだろう。

「この阿呆だか知りたかったが、あいにく顔は鎧のガードで覆われており、誰なのかはわからない。」

謎の騎士はあっちへフラフラ、こっちへフラフラして針路修正しつつ、少しずつレインの方へとやって来る。はつきり言って不気味だった。

「あの馬鹿たれは誰だ、レニ」

「え、あれはですねえ——」

「いや、ちよつと待てつ。やっぱり聞きたくないっ。あいつの正体なんて俺は聞きたくないぞっ」いきなり天恵のように正体がわかったレインは、いやいやをするように首を振った。そんなことをしてもどうにもならないのはわかっていたが。

案の定、レニが気の毒そうに言ってくれた。

「そうおっしゃるのなら、無理にはお教えしませんが。でもいづれにせよ、すぐにわかっちゃいますよ」

「ううっ。そうだよなあ」

重いため息を漏らしているうちにも、相手は酔っぱらいのような歩みでレイン達に近づき、とうとう大きく肩を揺らしながら彼の前に立った。

晩秋の虫のような、実にか細い声を出す。

「はあはあ……將軍……お帰りを、今か今かと……はあはあ……お待ち申し上げて」

「息が上がって苦しいんだろ、ヘルムを取れ、ヘルムをつ。うつつうしい」

長口上を遮ると、相手はプハアツというような息の音とともに、ヘルムをゴソゴソと取り去った。ウエーブのかかった金髪と、貴族特有のグラデーシヨンのような碧眼がその下から現れた。汗で濡れた白い肌が光り、切れ長の美しい瞳がどこか期待をたたえてレインを見据える。

意外にも、目の覚めるような美女である。

「はあはあ……とにかく、よくぞ戻られました、將軍」

「ああ。おまえも相変わらずだな、セノア」

レインはうんざりして、自分のもう一人の副官を見下ろした。

「で、もう呼吸は元に戻ったか」

「はっ。この程度、なにほどのことありません」

「あ、そう……そりゃ良かった」

「お気遣いは無用です。ところで將軍」

とセノアは堅苦しい表情で、レインの後ろに立つユーリを見つめた。

「こちらの女性にょせうは？」

「え、ああ……こいつはユーリと言うんだ。こいつの親父さんから頼まれてな、今日から騎士見習いとして面倒を見ることになった」

適当に紹介してから、お互いの親父同士が知り合いなんだ、と付け加える。

嬉しそうに頷うなずいたのはレニだけで、セノアは堅苦しい表情を崩さなかった。

「そうですか……。ユーリとやら、私の名は、セノア・アメリカ・エスターハートと言う。真ん中のアメリカは母の名ではなく、幼名ようめいだ。呼ぶときは、隊長でいい」

ぶっきらぼうに貴族特有の長つたらしい名前を名乗るセノアは、レインの目から見ても憎たらしく映る。

ユーリも同じ気分だったのか、非友好的な声と態度で、どぞよろしくと返した。女性二人の瞳の間で、密かに火花が散ったような気がしたりも。

「おいおい、いきなり緊迫してんじゃない。それよりセノア、説明してくれるよな」

「は？ 説明……と言われますと？」

「本気でわからない顔するし……だからっ、今にも戦いくさをおっぼじめようかという、この状態の説明だよっ」

怒りに任せてレインがブワツと腕を振り、広場でギウギウ詰めになっている味方連中を示した。

首を傾かげていたセノアは、ああそのことですかなどと言い、ちよつと得意げに小鼻こびを膨ふらませた。白い頬がさつと紅潮こうしやうした。

「無論っ、將軍が帰られたらすかさず進撃に移るべく、私が用意しておいたからですっ」

レインはむつつりと、得意満面のセノアの美人顔を見つめた。

そして一言。

「馬鹿か、おまえは」

「——ななっ」

「ななっ、じゃないっ。誰が勝手にそんなことしろって言ったんだっ。余計なことはせんでいいっ」
仰のげ返そるセノアに、なおもレインはたたまかける。

「だいたいおまえ、城のありったけの兵力をかき集めてどうすんだよっ。ちよつとは留守部隊として残しとかんと駄目だろっ。それくらいわからんのかっ」

「し、しかし……」

「しかしもかかしもないっ。すぐにあの集団を城内に戻せっ」

「まあまあ、將軍」

両手で押さえるようにしながら、レニがレインをなだめる。そんなレニに、レインはしんねりと

宣告した。

「……レニ。おまえ、監督不行届で来月の俸給は半分引いとくからな」

「ちよつ！ そんな殺生なつ。自分はちゃんと止めたんですつて！」

たちまち泣き声を上げるレニ。

レインはもう事は終わりとばかりに歩き出しながら、

「まあ、それは勘弁してやる。その代わり、ギェンターに早急に連絡を取れ。あいつに話がある」

「た、直ちに即刻連絡しますつ」

レニはほつと胸を撫で下ろした。

クリスと歩くレインの後をユーリが小走りに追い、レニはどこかへ行くごと踵を返す。

一見、事は済んだかに見えた。

だが、なかなかそうはいかないのだった。

「お待ちください！」

セノアが大声を出した。

「なんだよ。俺、部屋で寝たいんだが」

「出過ぎた真似だったのは認めますが」

振り向いたレインの愚痴を聞かず、セノアが言った。

「どうせすぐにザーマインに遠征に向かうのでしょうか？」

ならば、軍を今解散するのはいかなも

のかと」

うつ、来たぞ。

レインはやれやれと首を振った。

セノアが副官である以上、まさか謹慎の事実を黙っている訳にもいかない。第一、黙っていても、すぐにばれることだ。

しょうがないので、レインはなるべく軽い口調で説明することにした。どうせ付き合いの古いレニはいつものことだと気にしないだろうから、セノアだけである、問題は

「……あ、それだけだなあ。なんか俺が、軍議で不戦を唱えたら、陛下が怒っちゃってな。なんと、謹慎だよ、ははつ。まいったねー。はっは！」

事情をとことん簡単にして説明し、寒い笑いを浮かべて頭をかく。

そんなレインを、セノアは凍りついたようなデスマスク顔で見返した。

「……なんですと？」

「……なんですか？」

「だから、謹慎だよ、きんしんつ。おまえは城で反省でもしてろとさ。ま、そういうわけだから、俺は部屋へ戻るつ」

セノアの様子を見てさすがにヤバいと感じ、レインはさっさと身を翻した。要するに逃げただが、何歩も行かない内に、背後で血も凍るような悲鳴が湧き起こった。

言うまでもなく、セノアである。

ぎょっとして振り向くと、セノアは両手で頭を抱え、身を振り絞るようにして叫んでいる。気でも狂ったのか、と思わせるほどの金切り声だ。

ひぎゃああああああああ——なんて声の叫びが、辺りに満ち満ちた。

「お、おいおい……」

さすがのレインも驚きを禁じ得ない。というか、めちゃくちゃ不気味だ。

ユーリと、まだそこらにいたレニが、そばに寄って来た。

「將軍、ちょっと、いつもより激しくくないですか」

「え、あの人、いつもああやって喚くんですか、レニ隊長」

「まあね。でも、普段はもう少しマシなんだけどね」

「なんて言うか……个性的な人ですね」

全く、とレニが頷き、そこで二人そろってレインに目をやる。

「な、なんだよ。俺は悪くないぞ」

見苦しい言い訳をレインがした途端、ぷつぷつと悲鳴が止んだ。

一同は、固唾を呑んでセノアを見守った。

セノアは両足の間に腰を落とし、放心したようにその場にへたりこんでいた。

と、幾ばくもなく彼女の口から、不気味な笑い声が漏れ始めた。そして笑いつつ、なぜか身に

纏った鎧のパーツを次々と外す。つまり、鎧を脱ぎだした。

「な、なんかなんか危ない雰囲気ですよ、將軍っ。早めに謝った方がいいんじゃないですか……」

ゴクリとレニの喉が鳴る。

ユーリは反対に、おもしろそうにセノアを観察していた。

「むっ。ほんとに今回はヤバそうだよなあ。なあレニ、おまえ、ちょっと行って謝って来いよ」

「ご冗談を！ 自分にそんな度胸はありませんて」

「そうだよな。じゃあユーリ、おまえが行け」

「ばっ！ あたしだって嫌よっ……じゃなくて、嫌ですよっ。死んだおばあちゃんの遺言で、危ないことには首を突っ込むなって言われてるんですから！」

「おまえな、なにがばあちゃんの遺言なんだよっ。自分を省みてから物を言え、こらっ」

レニがチラチラとセノアを見つつ、

「將軍こそ、常日頃から俺には怖い物がないって言ってるじゃないですか。ここは將軍が行くべきでしょう」

「怖い物はなくても、苦手な物はあるんだっ。例えば口やかましい女だろ、それから家事のできないう女、最後に、笑いながらいきなり鎧を脱ぎ出す女だ！」

「……どうでもいいですけど、女性ばかりなんですね、將軍は」

「だからおまえが行けっ」

おまえが、いやそちらこそ、などと押しつけあっている間に、セノアは着々と鎧のパーツを外していき、ついに全部脱ぎ終えると、パタリと笑い止んだ。

ついで、剣を手にゆつくりと立ち上がる。

手が柄にかかり、すらりと長剣が抜かれた。固唾を吞んで事態を見守っていた、広場の部下達がどよめく。

「おおっ！ 副官殿が切れたぞおっ」

「ちよっちよっ！」

レニがギクリと身体を強ばらせた。

「これはちよつとヤバイですよ、將軍っ」

すっかり腰が引けたレニは、震える声でそう言うと、わたわたと後ずさりし始めた。

「じ、自分に関係ないですよね、ね、そうですね、セノアさん」

「レニ、おまえな……」

なんて薄情な部下だ！ なあ、そう思うだろ、とばかりにレインが横を見ると、既にユーリはダッシュで安全圏に逃げた後だった。離れた場所から、わくわくした表情でこちらに目を向けている。

「こんな奴らばっかりか、俺の周りは……」

嘆いているうちに、抜き身の剣を手にジリジリとセノアが歩み寄ってきた。目つきが非常に危ない。

「將軍……」

「な、なんだよ」

「私は、ほとほと愛想が尽き果てました。上將軍ともあろう方が、よもや不戦を唱え、おめおめと謹慎になどなるとは……」

「いや、俺には俺の考えがあつてだな」

「しかし將軍の恥は、副官たる私の恥」

まるつきり聞いていない。

「この上は潔く、二人で責任を取りましょう」

これはどうも本気みたいだ。

まあ俺が悪いんだが……まいったなあ。幾らなんでも、死んでやる訳にもいかんし。

ゆつくりと剣を振り上げたセノアに、今更ながらレインはそう思った。さっさと逃げ出したいが、プライドが邪魔してそもいかない。

とりあえず、フレンドリーな態度でなだめることにする。

「まあ落ち着け、セノア。いっとくが、ザーマインとの本格的な戦いはこれからなんだ。その新たな戦いに備えて、今は静かに闘志を燃やし——って、ぜんっぜんっ、聞いてないっ」

「お覚悟っ！」

裂帛の叫びと共に力任せに剣が振り下ろされ、きわどいところでレインの身体をかする。

ガシツと剣先が土を囓んだ。

「あつ、危ないな、おいつ。当たったらどうすんだよ！ さすがにシヤレにならんだろうがっ」
「將軍……」

セノアは茫洋とした瞳で、再び剣を振りかぶった。

「冥界への道すがら、今日の非礼は十分にお詫びいたします。潔く私と一緒に、いざー」
「ううっ、やっぱり聞いてないし。いざ、じゃないっての」

セノアは完全に自分の世界に入り込んでいた。レインの説得など、聞こえているかどうかも怪しいものである。

しょうがないなあ。

レインは仕方なく、自分の剣の柄に手をかけた。

「今度こそお覚悟おっ」

「ああもうっ、しょうがないなあ」

セノアが再度剣を振り下ろす。

途端に――

雷光の速さで魔剣が青い軌跡を空に描き、セノアの剣をあっさりと弾き返した。

飛ばされた剣は銀の照り返しを見せつつ、クルクルと回転しながら驚くほど遠くまで飛んでいき、遙か先の地面にグサリと刺さる。

「あつ」

セノアはポカんとそれを見届けた。

「ふっ」

意味もなく髪をかきあげながら、レインは気取った仕草で剣を収めた。

「昨日今日、剣を握ったばかりの初心者に、天才の俺が斬れるもんか！ ……おいどうした？ また惚けちまったのか？」

口を半開きにし、泣きそうな顔でセノアは突っ立っていた。なにか魂を抜かれてしまったような感じだ。

「おい、もしもし？ 正気だろうか？」

「……て、ください」

「はい？ なんだって？」

訳が分からず、耳を寄せると、セノアはいきなりレインの胸ぐらを、むんずとばかりに掴んだ。

「責任を取ってくださいいいっ」

「わっ。おいつ離せ、落ち着けっ」

「今回が私の初陣になるはずだったのに、それなのに、それなのにいいー」

耳元で、大音量でセノアが喚く。

レインはガクガクと揺さぶられながら、遠くでユリーの爆笑する声を確認に聞いた。

第二章 ラルフアスの戦い



夜半に降っていた小雨は、昼前になってようやく上がった。大変有り難い。なにしろ冬も近く、濡れて凍えるのはさすがに遠慮したいからだ。

ラルファスは馬上から自分の部隊を眺め、微かに首を振った。行軍中だから不思議はないが、みんな口数が少ない。しかし、それにしても、静かすぎるように思う。

街道を馬でゆく部下達は、ほとんどが俯いていて、まるで先の見えない不安に押しつぶされそうになっているようだ。

無理もない……戦う相手は大国ザーマインなのだから。勝てそうもない戦を喜ぶ者は少ないだろう。いかに名誉を重んじる騎士とはいえ、戦うからには生きて戻りたいと思う。その反対を望む者など、まずいない。

全員の命を預かるラルファスの胸は、重く塞がっていた。

ここは、半年前にザーマインによって滅ぼされた旧ルナンの地……人里離れた森を通る、細い街道である。

ラルファスは王に従って何日も前に国境を突破したのだが、今は自分の部隊だけで進軍していた。理由は簡単、王に置き去りにされたのである。

今朝、目が覚めてみると、あきれたことにダグラス王を初め、各上將軍仲間達の部隊はとつくと先へ行ってしまった後だった。

どうもラルファスは、王に相当な不興を買っているらしい。おそらく、レインをかばったのが原因だろう。

野營する折、自分達だけ遠くへ離されたからおかしいとは思ったが、よもや敵国のまっただ中で置き去りにされるとは思わなかった。

自分のやった行いを後悔するつもりはさらさらないラルファスではあるが、王の度量の狭さには、失望を通り越して絶望を覚える。

たかが意趣返しのためにそんなことをする神経が信じられない。もし、不意に戦いになったとしたら、自分が抜けた分だけ不利になるというのに。

……やめよう。考えても仕方がない。私は私なりに全力を尽くせばよい。

ラルファスはそう思うことにし、周りの部隊に大声で呼びかけた。

急いで王に追いつかねばならないのだが、それでも休憩は必要である。

「よしっ、全員この場で休憩だ！ 軽い物であれば、飲食も許可するぞ」

やや元気を取り戻した返事がそこかしこから聞こえ、みんな馬を降りて、思い思いに休憩を取り

だした。

その様子を高みから眺めるラルファスに、背後から大声。

「大将！ なにしてんです？ 休める時には休みましょうぜ！」

縦も長いが横も大きい巨漢が、ラルファスに馬を並べて来た。

髭だらけの、山賊のごとき迫力のある顔。野太い声に、固そうなモジャモジャの黒髪。

ラルファスが十五歳で初めて戦場に出た頃からの副官、グエンである。年齢はもう三十代も半ばだ。

「いや、私は……」

「さあ、向こうで一緒に休みやしよう。俺も付き合ひやすぜっ」

「——わかった、グエン」

ラルファスは苦笑して馬を降りた。

グエンは気はいいが頑固者で、こうと思えばこんだらなかな引下がない。付き合った方が利口というものだ。

それと、なぜかグエンはラルファスのことを大将と呼び、もう十年以上もその呼び方が続いている。訂正してやると、しばらくは『將軍』とちゃんと呼ぶようになるのだが、またすぐ大将に戻ってしまう。ラルファスはどうにも、まあ大将でもいいか、という気持ちになっていた。

グエンには、悪意は微塵もないのだから。

二人して、他の者とは少し離れた木の幹に背中を預けて座り込んだ。

「ちっ。地面が湿ってやがる。尻が濡れちまわあ」

グエンは顔をしかめてぼやいた。

「そう感じるのは生きていればこそだよ」

つい本音を洩らしてしまったラルフアスである。しまったと思った時には、グエンがすかさず聞き返してきた。

「やっぱり、今回は大将も危ないと思いやすかい？ 相手が悪すぎますしね」

「いや——」

とぼけようとしたが、ラルフアスは思い直した。グエンにまで隠しても仕方ない。

「そうだな。ザーマインが強大に過ぎるのは否定できないな」

「そうツスねえ。こっちはかき集められるだけ集めて一万五千ばかしなのに、向こうさんは、遠征軍だけで四万から五万はいるんでやししょう？」

「ああ、密偵の報告ではそうなっている。指揮官は……確かガルブレイク将軍か」

それと副官がルミナスとかいったはずだ。

ラルフアスは冷静に二人の名を思い出していた。ガルブレイクはこれまで何度も巨大な戦功を上げていた老練な將軍、そしてルミナスは、力よりも知力で勝負する策の多い男らしい。らしいというのは、何しろザーマインとサンクワールが戦うのはこれが初めてで、正確な情報を持っていない

からだ。

だが、完全実力主義のザーマインのこと。侮れない二人であることは間違いないだろう。

「ま、力の差はどうしようもないですがね、あつしとしちゃそれよりも、遙かに気に入らないことがあるんですぜ」

グエンは巨眼でラルフアスを睨む。なぜか盛大に顔をしかめた。

「おまえらしくもなく、遠回しな言い方じゃないか。なにが気に入らない？」

ラルフアスが穏やかに尋ねてやると、待つてましたとばかり、グエンが切り出す。

「もちろん、レインの大将のことですよ！」

「レインの？」

「そうツスよ！ あの人は仮にも大将の友達でしょう？ なのに、今回の逃げ方はどうにも気に入らやせんね。こんなヤバい戦いだつてのに、自分だけさっさと——。まるで、友達である大将を見捨てたみたいじゃないスかっ」

「レインか。今頃どうしているかな」

ラルフアスは、本国に残った親友の顔を思い出して微笑んだ。もう十日以上に自領に着いているだろうから、おそらく金髪美女のセノアに毎日文句を聞かされているだろう。

シエルファ王女のことを頼んだ手紙を送ったのだが、もう着いているだろうか。

「なにを笑っているんですかいつ。あつしは怒ってるんですぜ！」

「私に怒っても仕方あるまい」

「そりゃそうですがね……ええいつ、大将はどうもお人がよすぎていけねえつ。ちよつとは頭にこないんツスカっ」

話してて腹が立って来たのか、グエンは血膨ちぶれしたような顔を、ぐいつとラルファスに近づけて来た。

グエンには悪いが、子供が夜泣きしそうな顔だとラルファスは思う。もつとも、味のある顔だとも思うが。

ラルファスの思いなど知りもせず、グエンは一気に不満をぶちまけた。

「あつしはね、なんだかんだ言っつて、少しはあの人を認めていたんですぜ。大将を助けたこともあることだし。今回だつて他の誰を見捨てても、大将は見捨てやしないと思っつたのに。全く、なんてこった！」

「……そう言われてもな。私は特にレインに裏切られたとは思っつていないが」

「なにをこの後に及んで……これが裏切られたんじゃないつてんなら、他にどう説明をつけるんですかい？」

ラルファスは肩をすくめただけで、抗弁こうべんはしなかった。

レインがそんな男ではないことを、彼自身はよくわかつている。だが、それを他人に理解してもらうのは難しいのだ。心の奥底で信じているものを、言葉では到底表せない。

しかし、グエンも前に自分達がレインのお陰で助けられたのだから、少しはあいつを信じてもよさそうなものだ。

まあ、今度のことはあいつらしくないと言えば言えるのだが——
待てよ。

そこまで考え、ラルファスはふとひつかかるものを覚えた。

そもそもなぜあいつは、あんな危険をおかしてまで謹慎けんしんにこだわったのか。本当に逃げる気なら、もつと他の方法もあるだろうに。レインの取った行動には、なにか裏がないだろうか？ 思っつてもみながった裏が。

そこまで考え、天恵てんけいのように思いつく。

「そうか！ あいつめっ」

大声に目を丸くしたグエンに、ラルファスは熱心に説明した。

「わかったんだ。レインがどうして謹慎けんしんを望んだのか」

「……なんだつてんです？」

「つまりこういことだ。もしレインが我々と一緒に出撃していればどうなつていた？」

「そりゃ、一緒に戦つていたでしょうよ」

「そうじゃない、そういうことじゃない」

ラルファスは激しく首を振った。

「もし我々と出撃していれば、あいつも一緒に死ぬことになるんだ。それでは、目的を果たせない」「ちよつと、大将……まずいでませ」

さすがのグエンも周囲を気にした。ラルファスの言いようは、この戦いに勝利がないことを宣言するようなものだからだ。

「大将らしくもない。で、目的ってなんなんですかい？」

「言うまでもなく、我々を救うことだ」

ラルファスは自信を込めて断言した。

「軍令に従って遠征軍に加われれば、いかにあいつといえど、自在には動けまい？ 陛下の命令に縛られ、最後には死ぬしかない。だから、わざと謹慎になったんだ。そうすれば自分の思い通りに動けるから、まだ我々を救うための手が打てる。それが真相だ」

それに違いはない、とラルファスは確信した。

ただ、あの男が助けようとする中に陛下は含まれていないだろうが。

勢いこんだラルファスに対し、グエンは実に懐疑的な様子だった。強欲な高利貸しが、貧乏人の客を見るような顔をしている。

「……ま、それが真実なら、あの人もがんばってもらいたいもんですね。いつもご自分のことを天才だと言ってるんスから」

遠くの仲間の方へ目をやり、全然当てにしていけない調子のグエンである。今の説明を、一ミリも

信じていないらしい。

「必ずなにか手を打つだろうな。それからグエン、おまえは疑っているようだが、あいつは文字通りの天才だよ。なぜか、自分で自分の天才性を信じてはいないらしいが」

「じよ、冗談じゃないですぜ！」

びつくりしたグエンが目をむいた。

「十歩、歩くごとに、自分を天才だつて自称する人ですぜえ」

「グエンはうまい言い方をする。まあそれほどでもあるまいが、しょつちゅう口になっているのは間違いない。だが、話したことと本心は別だと私は思う」

「なんかあの人から聞いているんですかい？」

ひそひそと尋ねるグエンに、ラルファスはただ寂しげに笑いかけた。

「まさか。そんなに簡単に心の内をさらけ出す奴じゃないさ。ただ私がそう思うだけだ」

不審な顔で見返すグエンにそれ以上は説明せず、ラルファスはこちらへ歩み寄ってきたもう一人の副官を見て立ち上がった。

「どうした、ナイゼル？」

ナイゼルはそれなりの戦歴を持つ副官ではあるが、見た目はあまり騎士には見えない。

今朝洗ったと思えない艶のある黒髪が陽に映え、少女のように大きい緑の瞳が静かにラル

ファスを見つめている。

その美少年風の顔は、冷静そのものである。

だが、寡黙で孤独を好むこの若者が世間話をしに来たとは思えないので、なにか上官に報告する事態が生じたことは間違いない。ラルファスは、なんとなく嫌な予感がした。

「報告します」

ナイゼルは完璧な手の動きで敬礼を済ませてから、天気の話でもするように言った。

「定時を過ぎてても物見達が戻ってきません」

ラルファスはグエンと顔を見合わせた。

彼は敵地を進むときは、必ず複数の物見を送り出している。彼らが戻らないというのは、容易なことではない。

「おい！ 戻らねえって、全員がかよ？」

黙って頷くナイゼル。

ナイゼルはなんでもなような表情だが、無視していい事態ではない。物見が帰ってこないのは、普通、敵に殺されたと見るべきだからだ。

もちろんこの場合の敵とは、ザーマインに他ならない。

どうも敵は、とうにこちらの動きを掴んでいたらしい。

当たり前と言えば言えるな、とラルファスは唇を噛みしめた。占領して間もないとはいえ、敵領

を何日も行軍していれば感づかれて当然である。言ってもせんないが、最初から無理のある計画だったのだ。

「……大将、ヤバいんじゃないですかい」

「ああ。どうも奇襲をかけるつもりが、反対にこちらが奇襲を受けつつあるらしい。陛下が心配だ。すぐに追いつかないと！」

ラルファスの言葉が終わるか終わらないかの内に――

遠くから微かに、大勢の者達が上げる怒号のような声が響いてきた。

それに剣と剣がぶつかる金属音も。

「くっ。どうやら遅かったようだ！」

言うなり、ラルファスは鎧をガチャガチャと鳴らして走り出した。遅れじと二人の副官が後に続く。

三人で、この音は何事かときわつく部下達の間を駆け抜け、繋いであった馬に飛び乗る。部下達に、大声で呼びかけた。

「聞けっ。悪い知らせだが、どうやら敵に先手を打たれたようだ。おそらくこの音は、先に出立した陛下を初めとする部隊が交戦に入った音だ。我らも急ぎ参戦する！」

全員、さっきのざわめきが嘘のように静まりかえって、ラルファスの声に耳を傾けていた。全ての耳目が彼に集まっている。

ラルファスは、自分の言葉が皆——特に騎士隊長クラスのものに届いたかどうかを見極めてから、力強く号令を出した。

「よし！ では部隊ごとに整然と、速やかに進軍を開始せよ。戦場に着いたら一旦隊伍を整え、私の命令を待て。みんな、急げっ」

ラルファスの号令に従い、とまどっていた騎士の群が一つの目的の元に動き始めた。その動きは冷静で揺るぎない。

彼は厳しい顔つきの中にも、いささかの満足感を込めてグエンに話しかけた。

「みんな、いざ戦いともなれば落ち着くと見える。さすがに騎士だな」

「いやあ、それは違いますが。命令を下すのが大将だからこそ、ですよ」

「——？ 意味がわからんが」

眉をひそめるラルファスに穏やかに首を振って見せ、グエンはただ前を指差した。

「わかんなきやいいんすよ。それよりいきやしようぜ！ 大将がみんなに遅れちゃ話になんねえ」

「あ、ああ。そうだな！」

ラルファスは馬の腹を軽く蹴り、勇んで走りだした。

この遅れが致命的な物にならなければいいと祈りながら。

自分の部隊と共に急ぐことしばらく。聞こえてくる悲鳴や怒号は、いよいよその激しさを増して

きた。

さらに道行きを急ごうとするラルファスの目に、何人かの騎士がひとかたまりになってこちらに来るのが見えた。

見覚えのある百人隊長が混じっている。敵ではない。しかし、誰もが馬を失い、よろめきつつ走って来る。けが人が混じっていることから考えて、敗走しているようだ。

馬を止めて声をかけた。

「待て！ どうしたというのだ？ 戦いはどうなった」

「……ああっ」

軍勢を見て顔を強ばらせた男達は、ラルファスを認めて哀れなほどほっとしていた。

グエンが大きく鼻を鳴らして言った。

「おいおい、もう逃げる算段かよ、えっ」

「わ、我々はっ」

と、顔見知りの百人隊長が憤慨したように口を開いたが、じっと見守るラルファスの瞳に気圧されたように俯く。

「し、仕方なかったんだ！ な、仲間の裏切りやらなんやらで」

「裏切りっ？」

ラルファスはきつ、と相手を見据えた。

隊長格の男は、ゴクリと喉を鳴らした。

「そ、そうです。敵の大軍が現れたかとお、思ったら、いきなりガノア殿とギレス殿の部隊が陛下直属の部隊に襲いかかり……へ、陛下はあつさりと首を……」

ラルファスの顔色が変わったのを見て、男は語尾が震えて後を続けられなくなった。ギリツと歯を食いしばってから、ラルファスは静かに尋ねた。

「陛下が、お亡くなりになったというのだな」

「は、はいっ」

男達はラルファスの形相を目の当たりにし、絞首台上がる寸前の罪人のように怯えていた。

「……陛下を殺めたのは、ガノアとギレスのどちらだ？」

「わ、わかりません。お二人とも、まるで競争するようだったので」
ラルファスはおおよその事情を察した。

つまり、いつからかはわからないが、あの二人はザーマインの誘いを受けていたのだろう。それで、今回の無謀な作戦を知り、ついに最後の決断をしたというわけだ。

ザーマイン軍が姿を見せた途端、ここぞとばかりに、ダグラス王に殺到したらしい。王の首は降伏の良い手みやげであり、後の出世の道具にもなるだろうから。

「つきしょうつつ！ 汚ねえ野郎共、だぜっ」

啞然としていたグエンが、我にかえったように吠えた。ナイゼルは黙ったまま馬上で腕を組み、

何事か考えている。

「……先を急ぐぞ」

なにか言いたげな男達にはもう構わず、ラルファスは無念の思いで馬を進めた。

心の中を占めるのは、重い後悔の念である。

もっと自分がしつかりしていれば、陛下を助けることができたのではないか？ あるいは私は、ここに至るまでの選択をことごとく誤ったのではないだろうか？

今更の話だが、それでも自分を責めずにはいられない気分である。

「森の終わりが見えてきやしたぜ！」

グエンが気遣うように、声を掛けてきた。ラルファスは馬足を一層速め、明るい日差しの中に飛び出した。

視界が開けると同時に、遙か向こうに真つ黒な大軍が見えた。

ザーマイン軍の鎧は基本的に黒で統一されているので、その眺めは壮観である。まるで大地そのものが、巨大な黒い絨毯で覆われたようだ。

が、直接戦闘行動を続けているのはもはやその一部で、押しまくられているサンクワール軍は壊乱の一手前と言ってもいい。というか、あまりにも兵力が違いすぎ、早々に戦場で潰え、あるいは

は逃亡したようである。

四方に届こうかという敵に呑み込まれるように攻められ、突き崩され、誰が見てもサンクワールの敗北は明らかだった。

銀色に輝く鎧の群れは、漆黒の軍勢により、押し潰されかけている。

しかもラルファスの見る所、王の直属部隊五千は既に壊滅状態で、今戦っているのは生き残りの上將軍達が率いる、僅か数千程度の数に過ぎない。

ラルファスの後ろに整然と隊伍を連ねながら、部下達は声もなく前方の惨状を見つめていた。

「大将……こりゃ、もう」

グエンがためらいがちに声をかけてきた。

ゆつくりとラルファスは首を巡らせる。グエンの言いたいことはわかる。もうこの戦いに加わる意味はない。既に守るべき王は首にされているし、まだ戦っている味方も、すぐに全面敗走に移るに違いない。

ただ、あつさりとして逃がしてくれるザーマイン軍ではないから、もしラルファス達に撤退する気があるのなら、今この場でそうすべきだろう。

「わかってるさ、グエン」

自分でも驚くほど落ち着き払い、ラルファスは部下達に向かって宣言した。

「残念ながら、勝敗は決した。我らが今から戦いに加わる理由はないように思う」

シーンとして、整列した騎士達はラルファスの言葉に聞き入っていた。

「馬の足の続く限り、故郷のサンクワールへ走れ！ 私の命令を待つ必要はもうない。各自、故国を目指せ！」

さあ、と手を振るラルファス。

答礼はなかった。いつもはすぐに命令を遵守する部下達が、一人も動こうとしなかった。

いらだつてもう一度強く命令しようとしたラルファスの前に、寡黙なナイゼルが静かに前へ出た。「將軍はどうされるのです」

深い声で訊く。

「私か、私は——」

なにか言い訳らしきことを言おうと思ったが、早々にあきらめた。

そう簡単にごまかされる相手ではない。

「私はここを死に場所と決めた。私のことはいいから、おまえ達は国へ帰るんだ」

ナイゼルはなにも答えず、ラルファスをじっと見返した。

「……なにを考えている、ナイゼル」

「お教えできかねます。將軍はお止めになるでしょうから。ともあれ、お心はよくわかりました」

「その答え方で、どうするのかはもう明らかじゃないか！ 黙って言うとおりにしてくれないか」

「嫌です」

身も蓋もないほどキツパリとした返事。
ラルファスは一瞬二の句が継げず、啞然としてしまった。

そこでいきなり、真つ赤な顔のグエンが、ナイゼルの背中をぶつ叩いた。

この気のいい大男は余程感激したのか、バシツバシツと連続でナイゼルをどやしつけ、彼を咳き込ませた。

「えらいっ。それでこそ男だぜ！ 陰気な奴だと思ってたが、なかなか男気のある奴だったんだな、おめーは！」

「……グエン殿に誉められても嬉しくない」

ナイゼルは、咳が止まってからニコリともせずと言った。

「ちっ。可愛げのないそういうところは、相変わらずか」

グエンは太い喉を反らして豪快に笑った。

「おいおい。笑っている場合ではなからう、グエン。ナイゼルもだ。頼むから国に帰ってくれないか。今ならまだ間に合う」

「もういいじゃないですか、大将。死にたくない奴は放っておいても逃げるでしょうし、大将と運命を共にする気のある奴は、どう言ったところで言うことを聞きやしませんぜ」

背中に担いでいた巨大な戦斧を振り回し、グエンが陽気に言う。

自分のことを言ってるな、とラルファスはため息を吐いた。

ただし、グエンだけではない。

ナイゼルを初め、誰一人としてその場から動こうとしなかった。

「みんな、すまないな……」

「なにを言ってるんすか。それより、どこを攻めやす？ 敵は選び放題ですぜ」

「そうだな」

ラルファスは表情を改め、敵の大軍に離れて布陣する、かつての味方を指差した。

「どうせ死に行くにせよ、はじめだけはつけさせてもらおう」

サンクワールを裏切ったギレスは、大変珍しいことに、まだ戦闘中にも関わらず最前線に来ていた。

もちろん理由はある。

絶好の手柄であるダグラス王の首級を先にガノアに取られてしまったため、かつての味方が崩れた今こそ、少しでもたくさんの首を取って、ザーマインへの忠誠を明らかにしなくてはならないのだ。

寝返りの確約を最後まで保留にしたツケが、今になって回ってきたわけだ。

まあ、どうせかつての味方は全面潰走の有様なのだから、前線に出て来ても安全である。

とにかく、ギレスはそう考えていた。

——ガノアの馬鹿め。ちよつと王の首を取ったからといって、すぐに後方へ下がりおつて。まだまだ手柄を立てる機会だろうに。

馬上で太った身体をユラユラと揺らせながら、ギレスはのんびりと今後の計画に思いをはせていた。

ザーマインからの密書では、これまで彼が領していた領地の、数倍に当たる恩賞を約束されている。それだけの富があれば、新しい城を建てるのもよい。

今の城は、自分には狭すぎて似合わないと思つていた。

もつとたくさんの側室も必要だろう。部下に命じて、せいぜい美人を探させないと。

ギレスの脳裏に、何となくシエルファ王女のたぐいまれな美貌が浮かんだ。あの美少女をモノに出来ないだろうか。いや、不可能でもあるまい。今やあの少女も、昔のように高嶺の花ではない。

たおやかな王女を自分が弄ぶところを想像してニヤニヤしていると、副官の一人が馬を寄せてきた。顔が真っ青である。

「將軍！ 大変ですつ、敵つ、敵ですつ！」

「敵だど？ なにを寝ぼけている。あいつらならもう、全滅したも同然ではないか！」

「その敵ではありませんつ」

副官はいらだちと一抹の恐怖を顔に出し、ギレスに捲し立てた。

「ラ、ラルファス將軍の部隊が……あの方達の部隊がこちらに突つ込んで来ます！ もうすぐそこに」

「なにっ」

ギレスは慌てて前方を注視した。

言われてみれば、砂煙を巻き上げ、怒濤の勢いで小部隊がこちらに攻め寄せて来る。その、獅子を象った旗印は、紛れもなくラルファスの物だった。

「ば、馬鹿な……」

ギレスは太った身体を震わせて、呻き声を絞り出した。

ラルファスが到着していたのを見落としていたわけではない。しかし、まさかこの段階で彼が戦線に加わるとは思わなかったのだ。

とうに勝負が決まり、後はサンクワール軍の壊滅を待つだけの戦いに、戦巧者のラルファスともあろう者が無益に挑んでくるはずがない。あくまでサンクワールに忠誠を誓うにせよ、ここは退いて再戦を期すだろうと。

——損得勘定のみで生きてきたギレスの、それが大きな計算違いである。

ラルファスにとつての基準は、彼には到底理解できない物だったのだ。

「どうします、將軍っ」

副官が尋ねたが、訊きたいのはギレスの方だった。

「と、取りあえず防げっ。すぐにザーメイン軍が助けしてくれるはずだっ」
思いつくままにそう怒鳴った途端、第一波が来た。
敵の前衛が、鋭い錐のようにギレスの部隊に斬り込んだ。

ギレスの部下達にはほとんど戦意がなかった。
自分達が裏切り者だという後ろめたさの他に、ラルファスへの拭いきれない恐怖心もある。なにしろ、彼の勇猛さとその武勳は、サンクワールの騎士達の間轟いてる。

それは、指揮官であるギレスでさえ例外ではない。彼は非常な自信家だったが、それでも自分がラルファスに勝てるとは思っていなかった。

案の定、ラルファス自身が先頭に立つ部隊は、ギレスの前衛を一瞬にして叩き伏せてしまった。
ギレスの喉が鳴る。

なんという勢いだ……あんな奴に勝てるはずがない。ザーメインは、あいつらはどうして助けに
来ない!!

泣き出しそうになりながら後方を窺ったが、さしたる距離でもないのに、ザーメイン軍
を引いている。布陣した場所から一步も動かない。

面憎いほどの静けさで静観を保っている。

「くそっ、どうということだっ、これはっ」

副官に当たろうと脇を見たギレスは、いつの間にかその副官が姿を消しているのに気付き、背筋
が冷たくなった。

見捨てられた!

身体がガクガクと震え出す。しかも明らかに敵わないとわかり、他の将士も次々と馬首を巡らせ
て敗走に移っていた。

普段から威張り散らすギレスを慕う部下など皆無で、みんなこの時とばかり、いけ好かない指揮
官を見捨てたのである。

「あ、あ……」

恐怖に駆られ、ギレスは自分も逃げようと手綱を思いつき引き絞った。

お陰で慣れない馬はてきめんに機嫌を悪くして嘶き、騎手を振り落としてしまった。

「うわっ」

ギレスは無様に地面に転げ、強く腰を打って悲鳴を上げた。

間の悪いことに、丁度辺りの人影がまばらになっていたので、その様子はラルファスの目に止まっ
た。

お互いの目に一本の線を引いたように、ギレスとラルファスの視線がびたりと合う。

「ギレスっ! そこを動かすなっ!」

日頃物静かなラルファスが、雷鳴のような声を放った。

「ひいつ」

魂の吹き飛ぶ思いをたっぷりと味わい、ギレスは這うように逃げ出そうとしたが、既に馬はどこかへ駆け去った後だった。

「だ、誰かおらんのかっ」

その呼びかけに答える者は誰もおらず、ようやく立ち上がったときには、ラルファスその人がギレスの目の前に静かに立っていた。

背後には二人の平民の副官もいて、ギレスを厳しい表情で見据えている。

「あ、あっ……」

ギレスは、ゴクリと唾を呑み込んだ。

その顔から目を離さずに、ラルファスは静かに問いかけた。

「陛下を手に掛けたのはおまえか、ギレス」

「ちっ、違うっ。首を、く、首を取ったのはガノアの方だっ。お、俺じゃないっ」

「……そうか。ならば、あの男はおまえの後で冥界に送ってくれよう……さあ構える、ギレス」

ラルファスがスラリと剣を抜き、構えた。

こちらを射抜くような鋭い瞳、隙のない構え——まさに圧倒的な迫力だった。

ギレスは、普段のラルファスのことを、物静かでお人好しな奴、と評価していたものである。しかし、身体中が震え出しそうな恐怖と共に、今こそ悟った。

これまで自分が知っていたのは、この男のほんの一面に過ぎなかったのだ。

冗談じゃないぞ！ こんな奴と戦えるかっ。もし勝てる奴が居るとしたら、文字通りの化け物のレインくらいのものだっ。

「ま、待て。なにもそうむきになることもあるまい。なっ。サンクワールはもう滅んだも同然だ。

貴公も今後の身の振り方を考えねばならんだろう、なっ」

相手を刺激しないようにそうと立ち上がり、ギレスはへらへら笑う。

ラルファスは、単に眉をひそめただけだった。

ジャキッ

剣を持ち直し、ギレスの鼻先に突きつけてきた。

「ギレスよ。貴公も最後くらい、騎士らしく剣を取ったらどうだ？」

ラルファスの瞳を覗き込み、ギレスは震え上がった。

本気だっ、こいつは本気で俺を——

「お、恩賞を！ 俺が受け取るはずだった恩賞を、全ておまえにやるっ。た、たのむっ、命だけはっ」
「見苦しいぞっ、ギレスっ」

ラルファスが剣を振りかぶった。

ひいつ、とかされるような悲鳴を上げ、ギレスは背を向けて駆け出そうとした。

だが、すぐに「痴れ者っ」という大声と共に、背中に熱い衝撃を受け、ギレスの意識は永遠に消

し飛んだ。

「出来れば、後ろから斬りつけたりはしたくなかったのだが」
俯せに倒れたギレスの死骸を見やり、ラルファスは首を振った。

剣を一振りし、鞘に収める。

「しょうがないすよ。意地汚く逃げようとしたんですから。自業自得ですぜ」

ベツと唾を吐き、グエンは決めつけた。

最後まで見苦しかったギレスに、同情する気はまるでないようだ。

それはまた、冷たくギレスを見下ろすナイゼルも同様だろう。

「それにしても、大将。ザーマインの奴ら、このろくでなしをまるきり助けにきやせんでしたね。

どういう気なんでしょう？」

ラルファスは沈んだ声で教えてやった。

「別に不思議はあるまい。彼らにすれば、放っておけば邪魔者同士が潰しあってくれらるんだ。手間がかからなくていいじゃないか」

「——なるほど。てことは、ギレスは最初から見殺しにする気だったんすね。使い捨てってわけだ……けつ、気にいらねえ」

グエンがまた唾を吐く。

顔の割に潔癖な彼にすれば、我慢ならぬのだろう。

ラルファスもいい気分ではなかったが、素早く頭を切り換える。

ザーマインの黒い大軍の中に、ガノアの姿を探し求めた。

しかし、よほど後陣にいるのか、あの男の旗印はまるで見えない。

それでもあきらめずに目で探していると、やがて、ピーツツという笛の音のような音がした。

何の合図かと悩む必要はなかった。大陸中に名を轟かす漆黒の軍団が、地響きを立てて移動を始めたのである。目的は無論、ラルファス達の殲滅だろう。

既に、他の部隊は全滅するか逃げ散るかしてしまっている。

「どうやら、ガノアはあきらめるしかなさそうだな」

「——ですなあ」

平然と、グエンが同意する。

ナイゼルも慌てず騒がず、ただ黙って突入してくる大軍を見つめていた。

……とにかく、この二人には生き抜いてほしいのだが。

「グエン、それにナイゼル、ここは——」

「くだいはずせ、大将」

「もう気持ちは定まりました」

ラルファスが口を開いた途端、二人同時に言われてしまった。
「……そうか」

ラルファスとしても、それ以上は説得のしようがなかった。

この二人はなんとしても、自分と運命を共にする気なのだ。それを思いとどまらせるのは、例え命令によってさえ不可能だろう。

忠実な二人の副官を見、背後に整然と控える部下達を見てから、ラルファスはヒラリと愛馬に跨り、長槍を手にした。

「ならば、もはや語るべきことはない！ 我らが敵に、最後の意地を見せてくれよう！」

「おおうつー！」

二千に近い部下達の唱和を背中に受け、ラルファスは放たれた矢のように馬を走らせた。大地を揺るがして前進する敵の大軍をめざし、まっすぐ駆ける。

敵の前衛が見る見る内に近づく。突入する前に一度馬を止め、高らかに名乗りを上げた。

「我が名はラルファス・ジュリアード・サンクワール！ 功を望む者は、前へ出よう！」

ザーマインの騎士達は一瞬あつげに取られ、次の瞬間、生意気な敵の首級を上げるべく、ラルファスに殺到した。

「これは驚きましたね。ラルファスという男、どうやらこちらに挑んでくるようで」

ザーマインの本陣で副官のルミナスは、ぼつりと呟いた。

尖った顎となめらかな白い肌を持つ、三十がらみの武人である。身につけた黒い甲冑があまり似合っていない。その油断のならない目は、前方の敵を見据えていた。

よりにもよってラルファスその人を先頭に、哀れなほどの小勢がこちらに向かってくるのである。正直、あきれていたが、少しは感心もしていた。

「ふむ。あれでこそ、真の騎士というものだ。我が方へ寝返ったガノアやギレスとか申す者達とは雲泥の差だな。時に、あの男は王族なのか？ 今、サンクワール姓を名乗ったが」

筋肉のたっぷりついた分厚い身体をした偉丈夫が、長く伸ばした顎髭をしごきつつルミナスに声をかけた。短く刈り込んだ銀髪に、岩を削ったような敵つい顔立ちをしている。ルミナスよりだいぶ年上である。

この遠征軍の総指揮官、ガルブレイクだ。

「いえ、あのラルファスという男、年来の武功により、特にサンクワール姓を許されているとか……味方にするのなら、あのような者が望ましかったのですが」

ルミナスはそう言ったものの、同時にそれが無理であることもわかっていた。

事前の調べでも、ラルファスが忠誠心の厚い男だとわかっている。領地や金で転ぶくらいなら、とつくに誘いをかけていただろう。

大抵の人間は利で釣れる。しかし、それが不可能な者も確かにいるのだ。「今となっては、こちらに引き入れるのは無理か……では、どうする？」

ガルブレイクが残念そうに訊く。

もちろん、軍師たるルミナスの返事は決まっている。

敵は既にこちらの前衛と接触している。勝負はさほど長くはならないだろう。

「もちろん、倒します。味方に出来ない以上、敵には違いありませんから」

「それしかない、か」

「はい」

短く応じるルミナス。

どんなに優れた戦略眼を持つ騎士とさえ、遮るモノのない平原で、策も用いずに数万の兵力差を覆すことは出来ない。

兵力差こそ、勝敗を決める最も重要な要素なのだ。

大軍と小勢が百度ぶつかれば、百度とも大軍が勝つ。それが戦における絶対の真実である。

ただ……気になることがないではない。

他ならぬ、レインのことである。

実はルミナスがサンクワールの上将軍の中で一番警戒していたのが、「知られざる天才」こと、レインなのだ。

複数の間諜の報告では、レインは謹慎中だという。軍議の席において、奇襲の不利を説いたのが原因らしい。

さすがに無謀な戦いに従軍するほど愚かではなかった訳だが、しかし、それではあの男は自分の友人をも見捨てる気なのだろうか。

調べたところでは、ラルファスとはかなり親しい仲らしいのだが……

そこがルミナスの引っかかっている点であった。端的に言えば、畏でもあるのではないかと思うのだ。

だが、本当に策らしき物があるのなら、ラルファスのあの、無謀きわまる戦いぶりはどうだ？ あれでは指揮官たるラルファス自身の命が危なかるう。

——つまり、レインは策など巡らしていないということか。俺の考えすぎか。

ルミナスが考え込んでみると、ガルブレイクが急に話しかけてきた。

「なにか気になるのか」

「は……。いえ、あのラルファスの同僚の、レインのことが少し気になりました」

ルミナスは、自分が危惧するところを要領よく説明した。

「——というわけで、もしや、彼の邪魔が入るのではと」

「ふん、そういうえば、陛下もレインについて少し警告をされていたな。しかしそいつは今、自分の城にいるはずであろう。それに、もしその情報が誤りだったとしても、多少の援軍などこの大軍に

は通用せん」

「……彼は危険です。あまり甘く見たくないのですよ」

ルミナスはあえて上官に逆らう危険を犯し、慎重に異を唱えた。

彼には、レインを警戒するに足る、十分な理由があったのだ。しかし、それを今、ガルブレイクに告げるのは得策ではない気がする。

どのみち、ガルブレイクはルミナスの異論にさして関心を示さなかった。

馬鹿にしたような横目で見、大きく鼻を鳴らしただけである。

そして、すかさず文句。

「レインのことなど、どうでもいい。それより、どうしたルミナスよ。こちらの前衛がやや崩れているぞ。増援の指示をださんかっ。予備兵力は幾らでもあろう」

ガルブレイクの声に、ルミナスははっとして戦況を確認した。

ラルファスの部隊は、前衛と後衛を目まぐるしく入れ替える戦法で、こちらの部隊をやや斬り崩しつつある。あんな少人数で大したものだ。が、無論、戦況をひっくり返すほどではない。

気狂いしたようにこちらに突っかかっているが、それくらいで人数の差は挽回できない。

「やむを得ませんね。惜しい男ですが、そろそろ勝負を決めるといたしましょう」

ルミナスは伝令を呼び、さらに五千の兵を二手に分け、ラルファスの部隊の両翼に展開させることにした。これで決まりだろう。

連絡を受けた部隊が勇んで動き出す。ルミナスとガルブレイクはその動きを目で追った。

——しかし。

「んっ？」

ルミナスは目を細めた。

なぜか急に、視界が霞んだのだ。

妙にもやが出たと思つたら、たちまち白い霧に変化していく。

「むっ」

ガルブレイクも気付いたらしい。

遠くの森や、部隊——それらが、霧の中に溶け込みかけている。それも、どんどんひどくなっていく。

「なんだ、霧か？」

「いえ、これは……しまった！ 魔法かっ」

ミルクを溶かし込んだような真っ白な霧が、味方も敵も同様に覆い始めていた。ルミナスは慌てて、伝令に言って先程の命令を取り消させた。

このままでは同士討ちの危険があるからだ。

「どういことだ、ルミナスっ」

「敵の魔法でしょう。おそらく何人も魔法使いが、魔力で霧を生み出しているかと」

「なにっ」

やってくれたな、レイン。

ルミナスはそつとため息を吐いた。ここで邪魔をするのは、レイン以外には考えられない。やはり、ラルファスを見捨てる気はないらしい。

見張りの、マジックビジョンによる報告では、レインは居城から動いていないとのことだったが、おそらく部下でも派遣したのだろう。

してやられたわけだが、なぜかそう悪い気分でもなかった。

「ルミナスよ、これは下手に動けんな……」

「はい。同士討ちの危険を冒すわけにもいきません。何かに周囲を探索させて、術をかけている魔法使い達を探させましょう」

と、意見を述べつつも、そんな少数人数を見つけるのは無理だろうな、とルミナスは思っていた。どうやらここは、霧が止むのを待つ他はなさそうだ。

——やってくれたな。だがレインよ、逃げるだけでは勝てない。我々の最後の勝利は動かん。ルミナスは馬上で腕を組み、霧が晴れるのをじっと待った。

夢中で戦っていたラルファスは、周囲を霧に覆われて戦闘不能になったため、ようやく馬を休め

た。

ザーマイン軍も同士討ちを恐れて自然と後退していく。

「……命拾いしやしたね、大将」

グエンがため息を吐いて馬を寄せてきた。

奮闘したことを物語るように、彼の鎧は所々へこみ、亀裂が走っている。ひっそりと控えるナイゼルも同様だ。

「グエン、怪我をしたのかっ」

グエンの鎧の膝に当たる部分に穴が空き、そこからだらりと血が流れているのを見て、ラルファスは慌てて馬を降りようとした。

それをグエンが手で押しとどめる。

「どうってことありませんよ、大将。骨までは届いてません。大将こそ、腹を怪我していなさるじゃないですかい？」

「……私こそかすり傷だ」

なんでもないと、いうようにラルファスは力強く頷いた。本当はそう軽い傷でもなかったが、命に別状ないのは確かである。

「しかし、タイミング良く霧が出たもんですね。こりゃ奇跡ですぜ、大将」

「グエン、奇跡とは、そう簡単には起こらないものだ。これはレインの仕業だよ。あるいは、あい

つの部下の、な」

「ま、まさかあ。考えすぎでしょう」

「……誰かこつちへ来ます」

とナイゼルが静かに口を挟んだ。

言われてみると、蹄の音がする。誰かが単騎、近づいてきているらしい。

「敵かつ」

グエンがすかさず戦斧を持ち上げた。ナイゼルも槍を構え直す。

が、ラルファスはある予感がしたため、じっと動かなかった。

「二人とも武器を下ろせ。大丈夫だ、これは多分」

言い終わらない内に、濃い霧の中から黒馬に乗った男が踊り込んできた。

「ラルファス殿とお見受けしますが」

馬を止めた男は、まっすぐにラルファスを見つめた。

瘦せぎすの身体に、女性と見間違うような繊細な顔立ちをしている。鎧は身につけず、厚手のシャツの上にマントを羽織っていた。

黒い髪と緑の瞳はサンクワールの平民の特徴だが、ただの平民にしては、やけに目つきが鋭い。しかもなにが気に入らないのか、随分とぶすつとしている。あるいはそれが地顔なのだろうか。

「いかにも私がラルファスだが、そちらは？」

ラルファスが尋ねると、男は馬上で気がなさそうに一礼した。

「申し遅れました。私はギウンター・ヴァアロアと申す者。我が主レイン様の命により、ラルファス様をお迎えに上がりました」

ギウンターは不機嫌そうにむっつりと名乗った。

「やはりか」

大きく口を開けたグエンを横目で見つつ、ラルファスは小さく息を吐いた。

「あいつもここに来ているのか」

「いえ、レイン様はそのおつもりでしたが、私がお止めしました。主がコートクレアス城におられる方が、敵が油断しますので」

「……そうか。しかし、ギウンターとやら。私はレインの幕僚についてはかなり詳しいつもりだったが、君は初めて見るな」

「私はこのような時のためにレイン様が組織しておられた、諜報や工作に携わる部隊の長です。そんなことより、早く脱出してください。配下の者が魔法で霧を生み出していますが、魔力は無限に続くわけではありません」

若干のいらだちを含めた声で、ギウンターがラルファスを促した。おそらく、時間があまり無いのだろう。

ラルファスはすぐには答えず、じっと霧の奥を睨む。グエンやナイゼル、それに他の部下達も、

そんな上官を黙って見守っていた。

やがてラルファスは苦悩の声で言った。

「私は、出来ればレインの助けが入る前に死ぬつもりだった。陛下をむざむざと死なせた罪を免れ
る気はない。今もその気持ちに変わりはないんだ」

「それは、あくまでもここを死に場所とする、ということですか」

ギュンターは顔色も変えずに確認した。

「そうだ。帰ってレインに伝えてほしい。おまえは生きて王女様をお助けしてくれと。ザーマイン
はあの方を見逃しはしないだろうから。それから、出来れば部下達を連れて」

「おっと！」

黙って聞いていたゲンが断固として割り込んだ。

「その話なら、終わってますぜ。俺達はどこまでも大将に付き合う、てね」

「しかし……」

「いずれにせよ、私はお伝え出来かねますな」

揉め始めたラルファス達を、ギュンターが遮った。

「どういうことだ？」

「私にとって、レイン様の命令は絶対の物。あなたをお連れ出来ずに、おめおめと帰る気はありま
せん。望むところではありませんが、あなたに付き合って死ぬ他はありません」

むっつりとした表情を崩さず、ギュンターは世間話のようにさらりと語った。

「なに！」

この男、本気か、とラルファスはまじまじと相手の顔を覗き込む。

平然と見返された。その瞳は小揺るぎもしない。

一体、どういう男なのか。貴族には見えないのに姓を名乗ったりしたが。

「確かに死を選ぶのですね？ ならば私は部下に後事を託さねばなりません。では！」

「ま、待てっ」

未練なく走り去ろうとするギュンターを、ラルファスは進路を塞いで辛うじて止めた。

「まだなにかあるのですか？」

ものすごく迷惑そうにギュンターが言う。

ここまで自分の生死に興味を持たない男も珍しいだろう。ラルファスに付き合っただけで死ぬと言いつ
つ、別にこちらを思いとどまらせようとするでもないのだ。

ラルファスの心に、初めて迷いが生じた。

放っておけば、間違はなくこの男は死ぬだろう。その目を見る限り、脅しなどではない。

つまり、自分のせいでレインの忠臣を死なせることになる。

いや、問題はギュンターだけではない。ラルファスの部下達も、誰一人として逃げようとしな
いのだ。

ラルファス自身は、誰も道連れにする気はないというのに。
どうすればいい。どうすれば！

「大将……」

「將軍……」

グエンとナイゼルが心配そうにラルファスを見やる。

ギウンターはそんな彼らを顔色も変えずに眺めていたが、まるで今思いついたように咬きを漏らした。

「そうそう、レイン様の伝言を一つ、伝え忘れておりました」

「……なんだ？」

ラルファスが思い悩んだ顔を上げた。

ギウンターは落ち着き払って、

「レイン様はこう伝えよ、と申されました。喧嘩というのは途中経過は問題じゃない。最後に誰が立っているかなんだ、と」

「他にはなにか？」

ラルファスが苦勞して微笑を浮かべると、ギウンターはにこりともせず続けた。

「そう言えばこうも申しておりましたな。『俺に責任を押しつけるな、馬鹿たれっ』だそうです」

「それはまた、実にあいつらしい言い草だな」

ラルファスはこんな時にもかわららず、小さく吹き出した。

やがてそんな気もなかったのに大きく肩が震え、声を放って笑い声を上げた。部下達のとまどつたような視線もお構いなしに。

「で、どうなさいます？ お気持ちは変わりませんか。私は非常に急ぐのですが」

あくまでも不機嫌な表情のまま、ギウンターがめんどくさそうに訊いた。眉の間にぎちちと縦皺が寄っている。せつかくの美貌が台無しだった。

ラルファスはやっとな衝動的な笑いを引つ込め、力強く返す。

「いや、気が変わった。どうやらレインにはまだまだ勝算があるらしい。それに賭けることにした」

「……面倒なことですな。最初からそうおっしゃれば良かったのです」

ぶすつとギウンターが答えた。

第三章 シェルファ、 ガルフォート城を去る



立ち読みはここまで